

ジャカルタ在留邦人の家庭生活（そのII）

高 橋 準 郎

目次

- I はじめに
- II 調査の分析（分析項目）
 - 1 生活時間
 - a. 主婦の起床時刻・就寝時刻
 - b. 夫の帰宅時刻
 - 2 子供への躾や教育への配慮
 - 3 外国人と付き合うさいの障害の有無と障害理由
 - 4 付き合いをしている友人の人数（日本人・外国人）
 - 5 悩み事の相談相手
 - 6 情報の収集源（日本 ・インドネシア）
 - 7 日本との通信・連絡の回数
 - 8 滞在生活での楽しみ
 - 9 家族の共通行動の程度
 - 10 ジャカルタ・ジャパン・クラブの活動への関心と利用度
- III おわりに
- 付記

I はじめに

前号（淑徳大学研究紀要第28号，1994）では，ジャカルタ在留邦人の家庭生活についてとくに夫婦の性格の変化・絆の強さ，現地生活での苦労な事，家事使用人問題，近隣関係等を中心にみてきた。

本稿では，ひきつづいて前号では触れ得なかった生活時間の一部（起床時刻・就寝時刻・

夫の帰宅時刻)、友人関係(友人の人数・悩み事の相談相手の有無)、情報の収集源、日本との通信・連絡の方法と回数、家族の共通行動の程度等を中心に分析を試みたい。なお、今回は本調査につづいて1993年8～9月に実施された「ジャカルタ在留韓国系企業駐在員の家庭生活と意識調査」との比較から、ジャカルタにおける日・韓両国駐在員の家庭生活と意識についてもいくつかの項目において比較を試みてみたい。

II 調査の分析

今回の主な分析項目については上述のとおりであるが、具体的に取り上げた10項目について若干の説明を加えておきたい。

1. ①赤道直下にある東南アジアの国々では、朝は早くから活動を開始し日中の暑いさなかには午睡をとり、その分夜遅くまでの仕事や家族の団欒がつづく生活が一般的であるが、では、邦人家庭での主婦の起床時刻・就寝時刻についてはどうであろうか。まず、起床時刻については全体平均で午前5時51分となっており、日本での平均サラリーマン家庭での起床時刻と比較してもとくにきわだった差異は認められない。日・韓両家族との比較では平均起床時刻の差異よりも起床時間帯での明らかな差異が認められる。就寝時刻については午後11時28分となっており、起床時刻と同様にとくに大きな変化はみられない。日・韓両家庭との比較ではとくに韓国家庭での就寝時刻が日本人家庭よりも圧倒的に早まっていることが注目されよう。

②夫の平日の帰宅時刻については、午後8時26分となっている。ジャカルタでの通勤は殆どの駐在員の場合に自家用自動車での通勤であり、なお自宅から会社までの通勤時間が30～40分という距離にあることを考えればきわめて遅い帰宅時刻となっている。日・韓との比較では、明らかに邦人家庭での帰宅時刻が韓国人家庭よりも大幅に遅くなっていることが注目されよう。

2. 東南アジアの海外生活で、とくに両親が最も心配することの一つに子供への躾の問題がある。それは家事使用人への横柄な態度や見下した態度をとることであり、こうした態度が帰国時にそのまま祖父母や親族、あるいは学校などで見られることである。日・韓との比較では、「厳しく躾をしている」の割合では韓国人家庭が邦人家庭よりも10%以上も上回っている。

3. 邦人家庭の主婦の80%以上が外国人と友人になったり、付き合ったりする場合に障害があると回答しており、その具体的な内容では第一位に言語があげられている。しかし、その言語は現地語(インドネシア語)ではなく、英語をあげていることが特徴的である。日・韓との比較では文化的にもきわめて類似しているにもかかわらず、障害理由とその分散傾向

では明らかに異なった特徴を示していることが注目されよう。

4. 普段付き合いをしている友人の人数では、日本人の友人が平均で9, 7人, 外国人の友人1, 4人となっている。とくに主婦の全体の4割強が全く外国人の友人はいないと回答している。日・韓との比較ではここジャカルタでのそれぞれの友人数に関するかぎり、ほとんど同傾向を示していることが特徴的である。

5. 一般に海外生活では、言い知れぬ不安感や孤独感さらにはまた様々な葛藤や摩擦に悩まされる毎日であるが、ここではつね日ごろ個人や家庭の悩み事を身近に相談できる相手がいるかどうかについて、またいる場合にはその相手はどんな間柄の関係にある人かを尋ねている。相談相手の有無および間柄については、とくに年令による差異が注目されよう。日・韓との比較では、とくに相談相手では韓国家庭が近所の韓国家族や友人と回答しているのにたいして、日本人家庭では、夫の会社の同僚や上司の家族とする割合の高まっていることが特徴的である。

6. ジャカルタ生活では、犯罪や様々な危険から家族の身を守り、健康で安全な生活を送るためにはまずいち早く正確で信頼のおける情報をうることが、家族全員にとっての必須条件ともなっている。ここでは、日本とインドネシアに関するそれぞれの必要情報を主に何から得ているかについて尋ねている。主婦の場合、日・韓とも夫からとする割合が最も多くともに8割強を占めているが、その他の収集方法ではきわだった両国の差異が見られよう。

7. 日本への月平均の通信・連絡の回数と方法については、それぞれ家族・親族と友人への電話と手紙について尋ねている。家族・親族への電話回数では月平均2.09回であるのに対し、友人への回数では0.20回と大きな差がみられる。一方手紙に関しては、両者とも月平均ではともに一回を下回っておりほとんどその差異はみられない。通信・連絡の回数と方法については、とくに年令による差異が注目されよう。

8. 滞在生活での「楽しみ」については、「日本ではできない豊かな生活」、「テニスやゴルフなどのスポーツをする」、「異なる文化のなかで生活をしている」がそれぞれ上位三位までを占めている。日・韓との比較では、とくに日本人の主婦が豊かな生活やスポーツのできることを楽しみにあげているのにたいし、韓国家庭ではどちらかといえば家族同志や友人達との深い付き合い、夫の仕事の順調さを楽しみとしており、両者間にはきわめて特徴的な差異が見られることである。

9. 家族の共通行動の程度については、「ショッピングや散歩」、「催しものや祭り」、「外での食事」、「リクリエーションやテニス・ゴルフをする」、「パーティーへの招待」、「ジャパン・クラブにでかける」、「友人の家に遊びにゆく」のそれぞれの6つの家族行動を想定し、5段階尺度でとらえようとした。とくに家族の共通行動の程度と夫婦の絆の強さとの間には、明らかな相関関係の見られることが注目されよう。

10. ジャカルタ・ジャパン・クラブへの関心については、具体的な内容として組織への依存率、会報などの講読率、クラブの利用度、婦人部会等の活動に対する評価についてそれぞれ5段階尺度でとらえようとした。一般に、海外在留邦人にとって各国に存在する日本人会は在留邦人と現地社会との間にあって、一種の緩衝的な役割を果たすとともに、また邦人と現地社会との閉鎖性を助長させるものとして捉えられる傾向がある。ジャカルタではどのように評価されているであろうか。

1. 生活時間 (a) 主婦の起床時刻・就寝時刻

(b) 夫の帰宅時刻

すでに前号において、主婦の自由時間の長さ、夫婦の会話時間については分析を終えているので、ここでは前回ふれえなかった主婦の起床時刻・就寝時刻、夫の帰宅時刻についてみてみたい。

まず、主婦の起床時刻については全体平均で午前5時51分となっている。起床時刻の時間帯でもっとも多いのは「5～6時」(55.9%)、つづいて「6～7時」(32.7%)となっている。この両者で全体の88.6%を占めている。熱帯地域のここジャカルタでは家事使用人や現地の人々の朝は早くまだうす暗いうちから活動を始めるが、邦人家庭の主婦の起床時刻は日本にいる時に比べてとくに目立った差異は見られないようである。

これを年代別にみると、平均起床時刻では「40代」が最も早く全体の平均起床時刻よりも10分ほど早起きとなっている。ついで30代(5時50分)がつづき、とくに20代では6時36分と平均起床時刻よりも46分も遅くれ、各年代をつうじてもっとも起床時刻が遅くなっている。

起床時刻については、夫の職業、海外生活経験の有無、滞在年数等による変化はとくにみられないが、子供の有無別との比較では僅かながら子供のいる家庭での起床が早くなっている。またその場合に、どちらかといえば小学生以下の低年齢の子供をもつ家庭がそれ以上の年齢の子供をもつ家庭よりも起床時刻が若干に早まる傾向がみられる。

つぎに、就寝時刻についてみると全体平均では午後11時28分で日本での一般家庭(専業主婦)(注2)との比較でみてもとくにきわだった差異はみられない。また就寝時刻の時間帯についてみてみると、「午後11～12時」がもっとも多く39.1%と4割弱の高率を占め、ついで「午後10～11時」(28.4%)、「0時以降」(23.0%)とつづいている。最近における日本での主婦(専業主婦)の就寝時間帯に関する統計資料を持ち合わせていないので断定的なことは云えないが「午前0時以降」とする家庭の割合がきわめて高いように思われる。一般にインドネシアばかりではなく東南アジアの国々では、日中の過酷な暑さを避け午睡をとり、仕事は朝早くもしくは夕方涼しい時間帯に片付けて、家族の団欒は日没後から夜遅くまでつづくことを考えればごく当然なことのようと思われる。

年齢別との比較でみると、全体平均をうまわって就寝時刻がもっとも遅いのは40代で、午後11時53分と平均よりも25分も遅い就寝となっている。ついで20代の11時47分と続いている。一方各年代中もっとも早い就寝は60代以上で就寝時刻は10時となっており、平均就寝時刻よりも1時間30分弱も早まっている。

年代別との比較では、とくに40代でのもっとも早い起床時刻と反対にもっとも遅い就寝時刻が注目されよう。これらの数字から40代の「睡眠時間」を計算すれば、5時間47分しか取っていないことになる。ちなみに、NHK「国民生活時間調査」（注3）によれば日本人の平均睡眠時間は一般家庭の主婦（専業主婦）で7時間20分、共働きおよびパート勤務の女性が7時間10分となっている。ジャカルタでの40代の主婦の睡眠時間は日本の主婦に比べて、1時間10分も少ない睡眠時間となっていることが注目されよう。40代での起床時刻・就寝時刻に関してのこうした特異性は、少なくとも小学校低学年から高校生までの子供がおり、子供の学校関係の付き合いや諸準備、さらにはジャパン・クラブ婦人部会での中心的な役割を担うメンバーとして位置づけられていることなどの理由によるものと考えられよう。

夫の職業別との比較では、「その他」の職業での就寝時刻が最も遅く、ついで「サービス業」、「メーカー」の順となっており、夫の職業別によると思われる差異がきわめて強くみられることである。ついで、子供の有無別（同居している子がいる、いない）との比較では、子供のいない家庭での就寝時刻がいる家庭よりも明らかに遅く、とくに就寝時間帯では「午前0時以降」での就寝が多くきわだった差異がみられる。

日・韓との比較では、「起床時刻」についてはほぼ同傾向を示しておりほとんどその差異は認められないが、「就寝時刻」については邦人家庭が韓国家庭よりも1時間28分も遅い

表1 起床時刻・就寝時刻（全体平均）

（％）

| | 起 床 時 刻 | | | | | | 就 寝 時 刻 | | | | | |
|-----------|------------|------|------|------|------|--------|-----------|-------|--------|-------|------------|---------|
| | 午前 5時以前 | 5～6時 | 6～7時 | 7～8時 | 8時以降 | 平均時刻 | 午後 9時前 | 9～10時 | 10～11時 | 11～0時 | 午前 0時以降 | 平均時刻 |
| （全 日 本 国） | 2.5 | 55.9 | 32.7 | 7.7 | 1.2 | 5 : 51 | 3.3 | 6.2 | 28.4 | 39.1 | 23.0 | 11 : 28 |
| 韓 国 | 2.4 | 33.9 | 57.2 | 6.5 | 0.0 | 5 : 47 | 0.8 | 7.2 | 27.4 | 46.8 | 17.7 | 10 : 00 |
| 日 本 人 主 婦 | 20 代 | 0.0 | 8.3 | 55.6 | 33.3 | 2.8 | 6 : 37 | 0.0 | 0.0 | 33.3 | 33.3 | 11 : 47 |
| | 30 代 | 2.5 | 56.7 | 33.5 | 6.3 | 0.9 | 5 : 50 | 4.1 | 7.5 | 27.6 | 39.5 | 11 : 16 |
| | 40 代 | 2.8 | 71.3 | 20.3 | 4.2 | 1.4 | 5 : 41 | 2.1 | 4.2 | 28.7 | 40.6 | 11 : 53 |
| | 50 代 | 6.3 | 12.5 | 68.8 | 12.5 | 0.0 | 6 : 11 | 6.3 | 6.3 | 31.3 | 31.3 | 10 : 56 |
| | 60 代 以 上 | 0.0 | 33.3 | 66.7 | 0.0 | 0.0 | 5 : 57 | 0.0 | 33.3 | 33.3 | 33.4 | 10 : 00 |

注：韓国主婦のデータは、1993年8～9月に実施した「ジャカルタ在留韓国系企業駐在員家庭の生活と意識調査」（実施者、高橋）による。以下の韓国主婦のデータは全てこの調査によるものである。

図1 日本人・韓国主婦の起床時刻

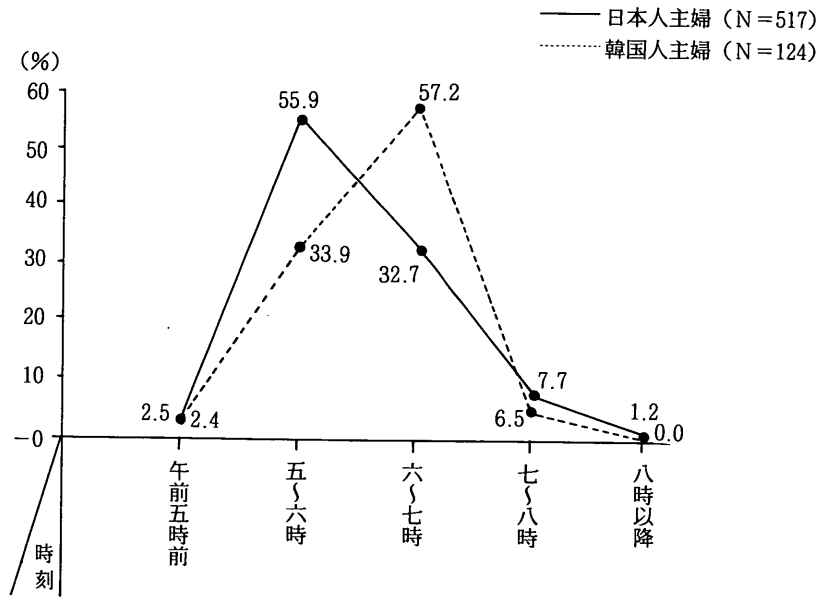
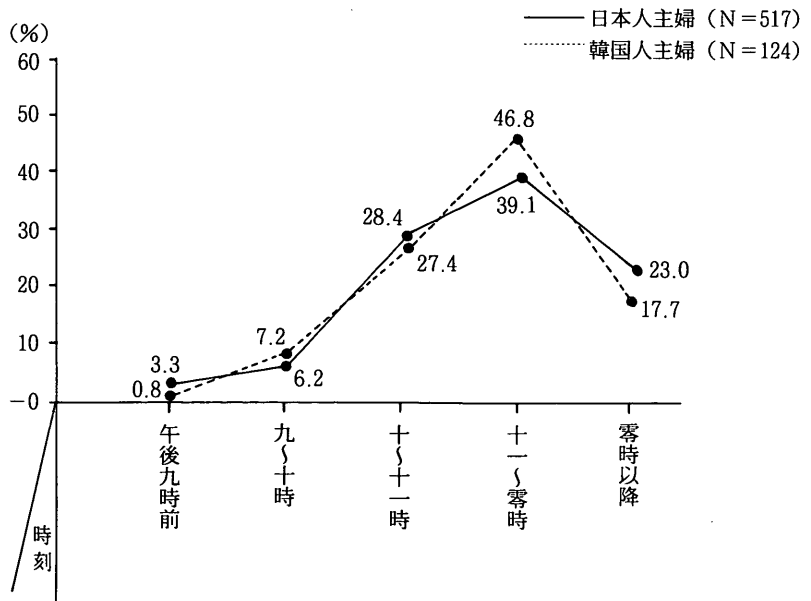


図2 日本人・韓国主婦の就寝時刻



就寝となっていることがとくに注目されよう。

b 夫の帰宅時刻

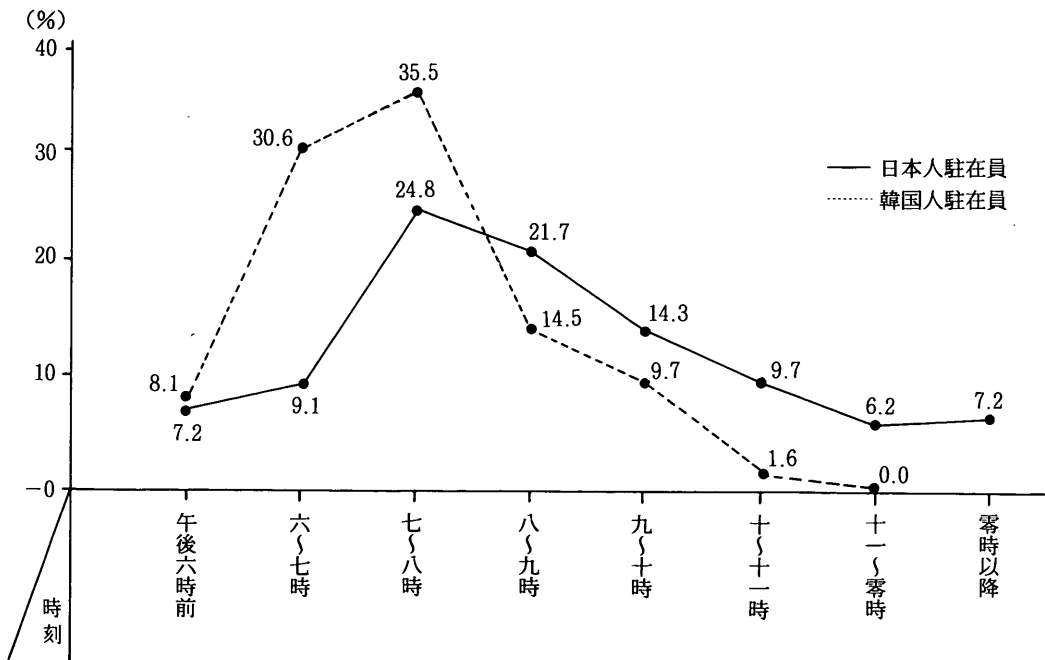
これまでの調査結果から、東南アジアに赴任した駐在員は国によっては多少の差は見られるものの、8割強の人々は色々な苦労はあったが仕事を中心に現地生活に順応してきたと評価している。しかし、反対に否定的な評価を下した駐在員も当然ながらみられ、とくにインドネシアは東南アジア各国の中にあって、様々な葛藤や対立が多くもっとも否定的な評価の

表2 職業別にみた帰宅時刻

(%)

| | 午前 6時前 | 6～7時 | 7～8時 | 8～9時 | 9～10時 | 10～11時 | 11～0時 | 午前 0時以降 | 平均帰宅 時刻 |
|-----------|-----------|------|------|------|-------|--------|-------|------------|------------|
| (全体) | 7.2 | 9.1 | 24.8 | 21.7 | 14.3 | 9.7 | 6.2 | 7.2 | 8:26 |
| 日本 韓国 | 8.1 | 30.6 | 35.5 | 14.5 | 9.7 | 1.6 | 0.0 | 0.0 | 7:48 |
| 日本人 主婦 | 金融 | 3.6 | 3.6 | 20.0 | 16.4 | 27.3 | 21.8 | 3.6 | 8:50 |
| | 商社 | 8.7 | 6.3 | 19.7 | 12.6 | 22.8 | 15.0 | 10.2 | 8:27 |
| | メーカー | 3.9 | 9.6 | 27.0 | 27.0 | 10.7 | 6.7 | 6.2 | 8:38 |
| | 公務員 | 28.9 | 21.1 | 34.2 | 2.6 | 5.3 | 5.3 | 2.6 | 6:43 |
| | サービス業 | 0.0 | 8.3 | 33.3 | 41.7 | 8.3 | 8.3 | 0.0 | 7:55 |
| | その他 | 5.8 | 9.6 | 25.0 | 30.8 | 7.7 | 3.8 | 4.8 | 8:35 |

図3 日・韓駐在員（夫）の帰宅時刻



占める割合が高くなっている。それは単に宗教や習慣の違いのみばかりではなく言語の問題とも複雑に絡み、さらには仕事上のさまざまな悩みも決して少なくはない。常に帰国後の仕事への不安を抱き、また現地従業員との対人関係や管理など多くの仕事を抱え責任の重さに疲労困憊しているところに、本社からの訪問客の接待や観光案内までこなさなければならない。いきおい夜遅く迄の仕事や付き合いがつづき帰宅は深夜ということも稀ではない。ここではこうした駐在員の帰宅時刻についてとくに伺ってみた。

全体から概観すると、ジャカルタでの平均帰宅時刻は8時26分となっている。ちなみにこれを平成2年に労働省が実施した東京都内とニューヨーク在住のサラリーマンとの生活調査（注4）にみられる帰宅時刻とを比較してみれば、東京都内のサラリーマンは8時0分、ニューヨーク在住のサラリーマン6時0分となっている。このデーターから明らかなように都内在住サラリーマン（夫40才、事務系会社員の普通世帯）より26分、ニューヨーク在住のサラリーマンより実に2時間21分も帰宅時刻が遅くなっている。さらに、韓国人駐在員との比較でも38分も遅い帰宅時刻となっていることが注目されよう。また、韓国人駐在員との比較からそれぞれの帰宅の時間帯についてみると、韓国人駐在員の場合にもっとも遅い時間帯でも全ての人々が午後11時までに帰宅しているのに対し、日本人駐在員の場合午後11時以降に帰宅する割合が13.4%、なかんずく午前12時以降については7.2%もいることに驚くほかはない。

では職業別との比較ではどうであろうか。帰宅のもっとも早いのは「公務員」の6時43分で、平均よりも1時間43分も早い帰宅であり、しかも公務員の場合は午後7時までに帰宅する人の割合が50%と過半数に達していることである。一方これに対して、もっとも帰宅時刻が遅いのは「金融」（8時50分）で平均時刻よりも24分遅く、ついで「メーカー」（8時38分）、「その他」（8時35分）の順とつづいている。とくに、12時以降の深夜帰宅のもっとも多いのは「その他」の業種で10%をこえており、ついで「メーカー」（9%）がつづいている。

滞在年数別との比較では、滞在年数「5年以上」で平均帰宅時刻よりも28分ほど早い帰宅時刻となっていること以外とくに滞在年数によると思われる差異は認められない。主婦の年代別との比較では30代、40代の主婦の家庭での帰宅時刻が、他の年代の家庭に比べて僅かながら遅くなる傾向がみられるがその差はきわめて僅少である。

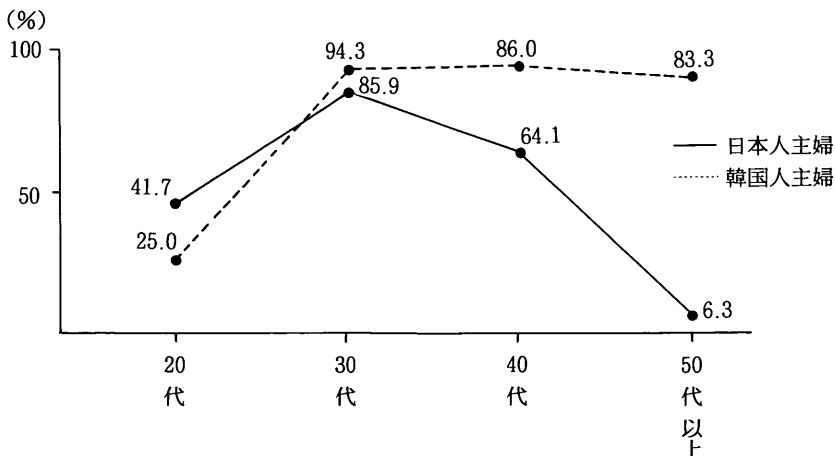
2. 高校生以下の子供への躰

これまでに東南アジア地域の中でも、とくにタイ、フィリピンでの調査結果では子供がしばしば運転手や家事使用人などに対して命令形としてのいわば「・・・しろ」といった横柄なまた見下した態度を取ることにたいして、親がいつも困惑しているとの報告がなされている。（注5）こうした躰の問題はジャカルタでも例外ではない。一般にジャカルタでは2～

3人の家事使用人がおり、そのほかにジャガーと呼ばれる夜警番人などの使用人が雇用されている。雇用者としての父（母）と家事使用人との応対を日常生活で具にみて育った子供たちが平然と両親と同じような命令的な言葉を発するのである。例えば「・・・ジャカルタ日本人学校の休暇にある子供が一時帰国した。そのとき、祖父母を前にして椅子にすわったその孫が、両足を前へつき出したというのだ。何のことかといぶかる祖父母の耳に飛び込んだものは「靴下をとって」ということばだった、という。」（注6）こうした笑うに笑えない例は枚挙に暇がない。それは両親の態度がそのまま子供に投影されたにすぎないのである。いわゆる異文化での生活環境では、一般に両親も子供も異なる環境に対しての何の知識や認識もないままに共同生活が開始される。とくに子供にとって、家庭内では両親のよって立つ日本の習慣や生活様式の中でほとんど生活することになる。しかし、家事使用人との関係でいえば一緒に生活が開始されることは家庭の中になまったく異なる文化が持ち込まれたことを意味する。それゆえに子供にとって家庭は異文化を体験する最初の間ともなる。いわゆる成長過程にある子供は当然ながら文化も修得中である。何の抵抗もなく両親と家事使用人との対人関係を受け入れていくことになり、それが当然の生活様式として内面化されていくことである。ところが、一時帰国や帰国時には親にとってはごく当前の日本的な生活様式も子供にとっては逆に異文化となってしまうことである。ごく当前のことが子供にはわからないのである。まさにさきの例はインドネシア文化を吸収した子供にとっては何ら不自然なことではなく日常的なことである。このことは最終的に親がいかに日本の生活様式を普段の家庭生活の中で教えていくかといういわゆる親の躰の問題としてとらえられるものといえる。

ここでは海外滞在中の親子関係でもきわめて深刻な躰の問題について、とくにこれまで見

図4 年齢別による子供への躰の有無（日・韓別）



てきた対人（例えば人を使うことや家事使用人に対して）への態度の面で十分な配慮をしているかどうかについて伺った。

まず、全体を概観してみると、しつけを十分「している」と回答している家庭は76.6%であり、まったく「していない」とする家庭は6.2%である。残る17.2%の家庭は無回答もしくは回答拒否であり、これまでの質問ではみられなかった回答率である。この状況はどのように解釈すべきであろうか。一般に最近の親たちは子供に嫌われたくないために厳しいしつけをしなくなったといわれている。こうした状況は家庭の親ばかりではなく学校や地域社会が、とくに未成年などの非行や傍若無人な行為にたいして厳しく咎める勇気を失っている状況ではもはや色褪せた質問なのかもしれない。

では、年代別との比較ではどうであろうか。しつけを十分「している」とする割合では30代がもっとも高く、実に85.9%の高率を占めている。ついで40代（74.7%）、20代（74.7%）、50代以上（6.3%）の順となっている。これらの年代間の差異は主に親がどの年齢の子供をもっているかによる、いわば子の年齢によるしつけの重要度の差によるものと考えられよう。

学歴別との比較では、しつけを「している」割合では「高等専門学校・短大」卒業者で80.5%と平均を上回ってもっとも高い割合を占めている。ついで「高等学校」卒業者（75.6%）、「大学」卒業者（72.8%）の順である。

滞在年数別では、滞在年数「3～5年」での家庭がしつけを「している」割合で80.3%ともっとも高くなっており、ついで「5年以上」（77.5%）、「1～3年」（75.5%）、「1年未満」（74.7%）の順となっており、とくに滞在年数3年以上でのしつけの「している」割合が高まっている。

海外生活経験の有無別との比較では、海外生活経験のある家庭が無い家庭よりも僅か5%ほど高まっているが、この僅少差ははたして海外生活経験の有無によるものかどうかは判断できない。

日・韓との比較では、韓国人家庭が邦人家庭よりもしつけを「している」割合が10%も高くなっている。また日・韓の比較で特徴的なことは、50代以上の家庭でのしつけを「している」割合が日本の場合に僅か6.3%なのに対し、韓国家庭の50代以上の主婦では80%弱がいまだにしつけをしていると回答していることである。こうした韓国人家庭での厳しいしつけは次のような話からも伺い知ることができる。韓国系企業駐在員の家庭生活に関する調査のさなか、インドネシアに帰化して25年以上にもなる元韓国崇実大学教授金基夏氏がインタビューに応じてくれたさい次のように述懐していたことが記憶にあたらしい。同教授によれば、80年代はじめまでにやってくる韓国人はいつも韓国人としての誇りと権威があった。決して他国では国家や民族の恥になるようなふるまいはすることはなかった。80年代後半からジャカルタにやって来る最近の韓国人の若者はところかまわず傍若無人な手に負えないふる

まいをするようになった。かつてはこうした韓国人を叱り飛ばして歩いたものだが今は手に負えない、韓国人はアジア人のなかでもとくに幼少のころから厳しいしつけと礼儀作法を身につけてきたはずなのに、と嘆いていたことである。とはいえ、調査結果での数字を見るかぎり、同教授の心配をよそに韓国人家庭でのしつけは邦人家庭よりもきわめて厳しくおこなわれているようである。

3. 外国人と付き合うさいの障害の有無と障害理由

- | | | |
|--------------------|----------------|----------------|
| 1. 会話能力 | 2. 風俗・習慣 | 3. 気おくれがし面倒 |
| 4. 友人をつくる精神的な余裕がない | 5. きっかけがつかめない。 | |
| 6. 人物の見わけがつかない | 7. 内向的性格 | 8. 付き合い方がわからない |
| 9. 外国人に対するコンプレックス | 10. その暇がない | |
| 11. その他（ | | ） |

近年の日本は経済においては完全な国際化を達成したといえるかもしれない。ヨーロッパ、アメリカ、アジアをはじめとして世界のいたるところでモノとしての自動車、電気製品、あるいは精密情報機器などの日本製品が氾濫している。日本人の海外旅行者は平成4年で約1,179万人となっており、10年前に比べてほぼ2.9倍となっている。また、諸外国に長期（3ヶ月以上）にわたって滞在する日本人の数も急増し、この10年間に1.9倍、平成3年現在で約41万人の日本人が海外に長期滞在をしている。このうち、仕事（職務）のために海外に赴任する海外企業関係者（家族を含む）は、平成3年で約27万人にのぼっている。（注7）従来、海外赴任はエリートとしての一部特定層に限られていたが現在ではまさに生産現場等を含めた様々な人々が赴任している。一方、日本に在留している外国人も増え平成4年現在ではほぼ128万人に達し、過去5年間で約45%の増加率となっている。（注8）このように数字上から見るかぎり、モノや人の国際交流は急速に拡大しているとはいえ決してわたし達日本人の国際化が進展しているとは言い難い。これだけの往来が続いているにもかかわらず、とくに日本人の場合は伝統的に外国人との付き合いをもっとも苦手としている。その一般的な理由としては、日本人の語学力をはじめとして交際のエチケットを知らない、風俗・習慣が異なる、時間的余裕が無い、家が狭いなどの様々の要因がこれまでその理由としてあげられている。またわたし達が普段ほとんど気づいていないものとして「・・・これに加えて、文化・社会的な要因として、独特のエスノセントリズム（自文化中心主義）がはたらき、これらの結果、日本人の多くが「外国人ざらい（xenophobia）」に陥ってしまっている」（注9）などの指摘も見られる。ここでは、日本人のもっとも不得意とする外国人との付き合い

において、障害となるであろうと想定されるそれぞれの理由について尋ねている。

まず、障害があるかどうかでは全体の84.1%の主婦が「ある」と回答している。そこで、その理由についてみると①「会話能力」が86.2%と圧倒的に高率である。ついで②「きっかけがつかめない」(26.6%)、③「気後れがして面倒」の順となっている。以下、低率であるが「風俗・習慣の違い」(14.5%)、「付き合い方がわからない」(7.7%)と続いている。敢えて第一位の「言語能力」についていえば、外国人とのコミュニケーションをする際の基本的な会話を無視してきた我が国の英語教育の問題点を如実に示すものであることは言うまでもない。

日・韓との比較では、両国の主婦とも第一位に「言語能力」、第二位に「きっかけがつかめない」をとともにあげており、とくに言語能力ではともに80%強とこれもまたほぼ同じ割合を示している。その他の特徴についてみてみると、どちらかと云えば韓国人主婦では日本人主婦に比べて「きっかけがつかめない」「内向的である」「外国人に対するコンプレックス」などの項目でいずれも高い割合を占めていることが特徴である。

つぎに、年代別との比較ではどうであろうか。まず、20代での傾向としては、僅かながら他の年代にくらべて「風俗・習慣の違い」「外国人に対するコンプレックス」での理由を上げる割合が高くなっている。30代ではとくに目立った変化はみられないが、40代では各年代に比べて僅かの差ながら「言語能力」への自信のほどがうかがわれる。一方、50代以上ではほとんどの主婦がこれとは反対に「言語能力」の不足を一樣に障害理由としてあげていることが特徴的である。

学歴別との比較では、障害が「ある」、「ない」の割合では明らかに高学歴化するにつれて障害が「無い」とする割合が高まってゆく傾向がみられる。しかし、具体的な障害理由ではとくに学歴によるものと思われる目立った変化はみられない。

滞在年数別との比較では、まず障害が「ある」「ない」の割合では明らかに滞在年数の長さに比例して「ない」とする傾向が高まっていく傾向がみられる。障害理由では、とくに滞在年数「5年以上」では「言語能力」に対してはもっとも自信があると回答していることが注目されよう。一方、これとは反対にいずれも「きっかけがつかめない」、「気後れがして面倒」、「風俗・習慣の違い」の障害理由では、他のどの滞在年数者よりも高い分散が見られることもまた特徴的でもある。また、滞在年数「1年未満」ではとくに「言語能力」を障害理由とする割合が各滞在年数者の中でも最も高く、実に平均をはるかに上回る90.8%の高率を占めていることも特徴的である。

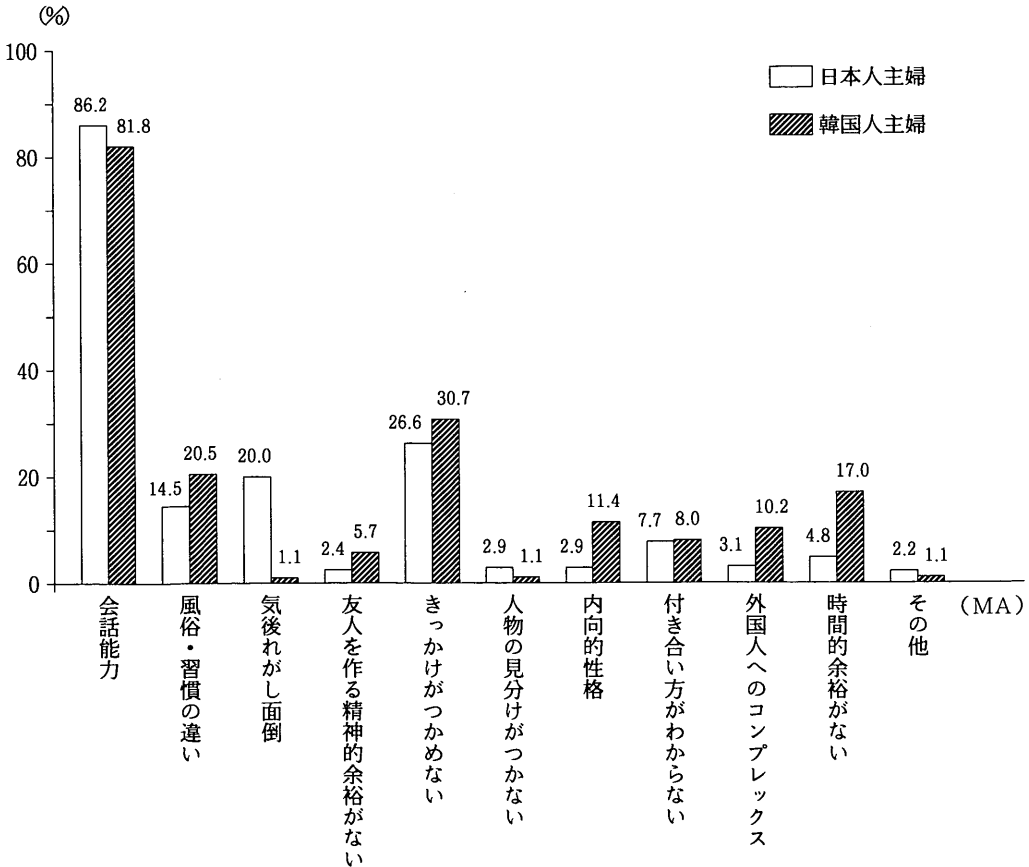
海外生活経験の有無別との比較では、障害が「ある」の割合では海外生活経験の無い主婦がある主婦よりも10%も高い割合を占めている。具体的な障害理由では、海外生活経験を持たない主婦がとくに「言語能力」(88.8%)をもっとも大きな要因としてあげ、全体平均よ

表3 年齢別による外国人とつきあうさいの障害理由 (%)

| | 会話能力 | 風俗・習慣 | 気後れがし | 面倒がし | 精神的な余裕がない | きつかけがない | 人物の見分けがつかない | 内向的性格 | 付き合い方がわからない | 外国人へのコンプレックス | 時間的余裕がない | その他 |
|-------|-------|-------|-------|------|-----------|---------|-------------|-------|-------------|--------------|----------|-----|
| (全体) | | | | | | | | | | | | |
| 日本 | 86.2 | 14.5 | 20.0 | 2.4 | 26.6 | 2.9 | 2.9 | 7.7 | 3.1 | 4.8 | 2.2 | |
| 韓国 | 81.8 | 20.5 | 1.1 | 5.7 | 30.7 | 1.1 | 11.4 | 8.0 | 10.2 | 17.0 | 1.1 | |
| 日本人主婦 | 20代 | 84.6 | 19.2 | 15.4 | 3.8 | 23.1 | 3.8 | 7.7 | 7.7 | 3.8 | 0.0 | |
| | 30代 | 87.9 | 13.3 | 20.8 | 2.3 | 26.5 | 3.4 | 2.7 | 8.0 | 2.7 | 5.3 | 2.3 |
| | 40代 | 80.9 | 16.4 | 21.8 | 1.8 | 27.3 | 1.8 | 1.8 | 7.3 | 3.6 | 3.6 | 2.7 |
| | 50代以上 | 100.0 | 16.7 | 0.0 | 8.3 | 25.0 | 0.0 | 8.3 | 8.3 | 0.0 | 8.3 | 0.0 |

(MA)

図5 外国人と付き合うさいの障害理由



りも20%弱もうまわっている。このほかの障害理由では、とくに海外生活経験をもつ主婦が「きっかけがつかめない」、「内向的な性格である」の項目でそれぞれ海外生活経験を持たない主婦よりも高い割合を占めていることが特徴的である。なお、これらと関連する調査として1989年に経済企画庁が東京23区内の都民に実施した調査では、外国人と交際するときの「心配理由」として(1)「交際のエチケットを知らない」(2)「外国語によるコミュニケーション」(3)「住宅事情が悪いこと」(4)「交流相手の考え方を理解できるか」(5)「日本人の生活習慣を理解できるか」(6)「時間的余裕がない」の順であった(注10)。ここでは、言語能力は第二位に位置づけられているが、外国人との交流ないし付き合いでの障害理由(制約条件)ではやはり言語が大きなウェイトを占めていることがこの調査結果からも明らかにされている。

4. 付き合いしている友人の人数(日本人・外国人)

衆知のとおり、これまでの幾多の海外在留邦人の調査報告などでもすでに指摘されているように、東南アジア諸国のみならず国際社会での日本人の閉鎖性が問題視されてきて久しい。こうした指摘は上記の外国人と付き合うさいの障害理由や、さらには前号での「近隣関係と付き合いの程度」(注11)の分析からも明かなように、本調査でも十分うらづけられた結果となっている。こうした日本人の閉鎖性や付き合いの希薄さはなにも海外の日本人だけに限ったことではなく、すでに日本での近隣関係や日本人同志の付き合い自体が全面的なものからきわめて部分的なものへと変化してきており、また親子関係をはじめとして緊密な人間関係を極力避ける国民的傾向がそのままあらわれているに過ぎないといえる。ここでは、家族レベルでの近隣関係とは別に、主婦の交際している友人の人数についてそれぞれ尋ねている。

まず、全体を概観すると主婦の日頃付き合っている日本人の友人は、全体平均で9.71人となっている。これは韓国主婦の場合と偶然にもまったく一致している。つぎに、友人の人数を1人から15人以上までをそれぞれ8段階に区切ってみると、もっとも多いのは「9～10人」で28.8%を占め、ついで「5～6人」(22.9%),「15人以上」(20.7%)の順である。日本での主婦(専業主婦)の友人数に関するデータを持ち合わせていないので、比較はできないが、インタビューに応じてくれた大方の主婦がジャカルタ生活でのもっとも良かったことの一つは日本にいたときよりも友人が一樣に増えたと言っていることから推察すれば、かなり活発な交遊関係がもたれているといえるのではないだろうか。

これを年代別との比較でみると、50代以上で平均人数を僅かながら下まわるほかはとくに年代別によると思われる差異は認められない。

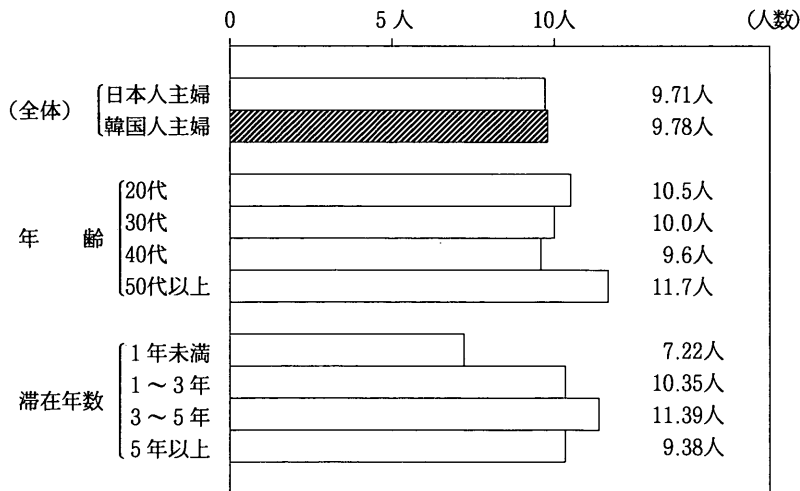
滞在年数別との比較では、滞在年数「1年未満」と「5年以上」でともに全体平均人数をやや下まわっている。

表4 自国の友人の人数

(%)

| | | 2人以下 | 3～4人 | 5～6人 | 7～8人 | 9～10人 | 11～12人 | 13～14人 | 15人以上 | 平均人数 |
|------|--------|------|------|------|------|-------|--------|--------|-------|--------|
| (全体) | 日本 | 5.2 | 12.8 | 22.9 | 8.5 | 28.8 | 0.8 | 0.4 | 20.7 | 9.71人 |
| | 韓国 | 3.2 | 11.3 | 13.7 | 5.6 | 27.9 | 0.8 | 0.8 | 31.7 | 9.78人 |
| 年齢 | 20代 | 0.0 | 19.4 | 25.0 | 11.1 | 13.8 | 2.7 | 2.7 | 25.3 | 10.47人 |
| | 30代 | 5.4 | 12.8 | 22.8 | 6.5 | 29.7 | 0.6 | 0.3 | 21.9 | 10.04人 |
| | 40代 | 6.3 | 11.2 | 21.7 | 13.3 | 31.5 | 0.7 | 0.0 | 17.5 | 9.59人 |
| | 50代以上 | 12.5 | 11.1 | 10.5 | 0.0 | 36.8 | 0.0 | 0.0 | 15.8 | 8.75人 |
| 滞在年数 | 1年未満 | 6.1 | 24.3 | 29.3 | 6.0 | 20.2 | 2.0 | 1.0 | 10.1 | 7.22人 |
| | 1～3年未満 | 11.0 | 17.8 | 11.7 | 3.9 | 29.7 | 0.4 | 0.0 | 25.0 | 10.35人 |
| | 3～5年未満 | 5.7 | 5.8 | 16.4 | 12.3 | 31.9 | 0.8 | 0.8 | 22.1 | 11.39人 |
| | 5年以上 | 5.0 | 7.5 | 32.5 | 10.5 | 32.5 | 0.0 | 0.0 | 15.0 | 9.38人 |

図6 自国の友人の人数（国別・年齢別・滞在年数別）



つぎに、外国人の友人については、1人の友人も「いない」とする主婦が44.3%を占めている。全体の平均友人数では1.16人となっている。なお、この場合の外国人のほとんどはインドネシア人である（インドネシア系中国人も含む）。

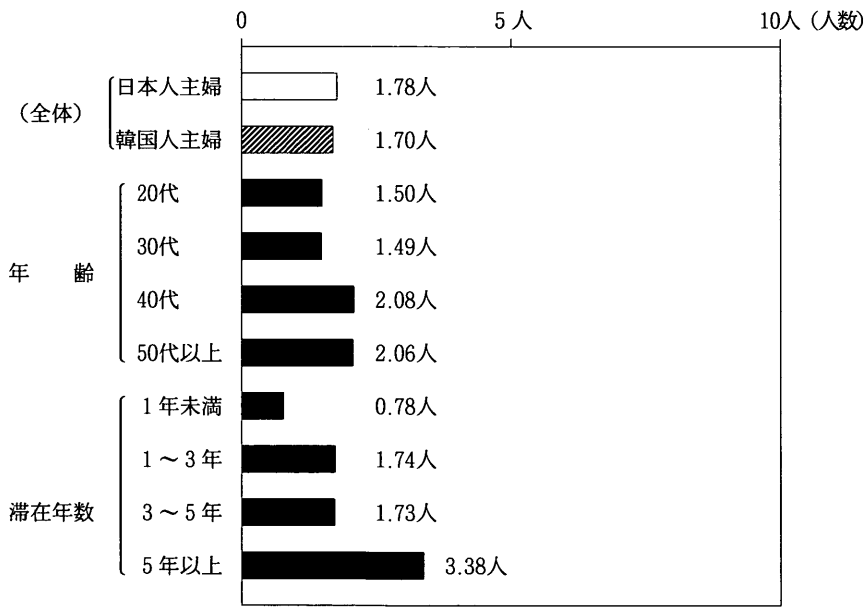
滞在年数別との比較では、滞在年数「1年未満」と「5年以上」でとくにきわだった差異がみられる。滞在年数「1年未満」では、外国人の友人は1人も「いない」とする割合では54.5%と過半数に達しており、しかも平均人数では0.78人ともっとも少ない。一方、滞在年

表5 外国人の友人の人数

(%)

| | | 0 人 | 1 人 | 2 人 | 3 人 | 4 人 | 5 人 | 6人以上 | 平均人数 |
|---------|---------|------|------|------|------|-----|------|------|-------|
| (全体) | 日 本 | 44.3 | 17.2 | 14.7 | 10.8 | 2.5 | 4.8 | 5.6 | 1.78人 |
| | 韓 国 | 50.0 | 8.9 | 12.1 | 9.7 | 1.6 | 4.8 | 12.9 | 1.70人 |
| 年 齢 | 20 代 | 44.4 | 19.4 | 13.9 | 11.1 | 2.8 | 2.8 | 5.6 | 1.50人 |
| | 30 代 | 49.2 | 17.9 | 12.9 | 7.8 | 2.8 | 4.4 | 5.0 | 1.49人 |
| | 40 代 | 34.3 | 15.4 | 19.6 | 16.8 | 2.1 | 4.9 | 7.0 | 2.08人 |
| | 50 代 以上 | 37.5 | 18.8 | 12.5 | 12.5 | 0.0 | 12.5 | 6.3 | 2.06人 |
| 滞 在 年 数 | 1年未満 | 54.5 | 24.2 | 12.1 | 8.1 | 0.0 | 1.0 | 0.0 | 0.78人 |
| | 1～2年 | 44.1 | 17.2 | 14.5 | 8.2 | 4.7 | 5.1 | 6.3 | 1.74人 |
| | 3～4年 | 45.1 | 11.5 | 14.8 | 16.4 | 0.8 | 5.7 | 5.7 | 1.73人 |
| | 5年以上 | 17.5 | 17.5 | 22.5 | 17.5 | 0.0 | 10.0 | 15.0 | 3.38人 |

図7 外国人の友人の人数（国別・年齢別・滞在年数別）



数「5年以上」では「いない」とする割合は僅か17.5%を占めるに過ぎず、また友人数では3.38人ともっとも多くなっている。外国人の友人数と滞在年数との間には密接な相関関係がみられるといえよう。

海外生活経験の有無別との比較では、数字上からみるかぎり、海外生活経験がある主婦（2.22人）が海外生活経験のない主婦（1.49人）をうわまわっている。

5. 悩み事の相談相手の有無とその間柄

1. 夫の会社の同僚の家族 2. 夫の会社の上司の家族
 3. 近所の日本人の家族 4. 子供の通学している日本人学校の知り合いの家族
 5. サークル仲間の日本人家族 6. 近所あるいは知り合いのインドネシア人家族
 7. R. T. 8. その他（ ）

とかく海外生活では、家庭生活ばかりではなく、日本人同志の付き合いや近隣との付き合い、さらには夫の会社などとの関係で予期しない様々な悩みやまたは決断を迫られる事柄が多い。ここではこうした家族の悩み事などについて親しく相談できる友人や家族がいるかどうかについて尋ねている。

全体から概観すると、こうした場合の相談相手が「いる」と回答とした割合は90.3%を占め、残る1割弱の家庭では「いない」としている。そこで、「いる」と回答した主婦にその相談相手の人数を尋ねたところ日本人家族は平均で1.0人で、外国人家族（0.07人）はほとんどみられない。これに関連するデータとしては、1989年に住友生命が欧米およびアジア地域10ヶ国の日本人ビジネスマンの主婦に実施した調査がある。この調査結果によると、悩み事の相談できる相手人数は日本人2.46人、外国人が1.57人と報告されている（注12）。ジャカルタの場合、これとの比較でみればそれぞれほぼ半数に満たない。

つぎに、ではその相談相手とはどのような間柄かについて尋ねると、①「夫の同僚の家族」がもっとも多く42.6%の高率を占めている。ついで②「近所の日本人家族」（38.3%）、③「子供の学校の知り合いの家族」（30.0%）の順である。以下、「夫の上司の家族」、「知り合いのインドネシア人家族」、「その他＜宗教団体のメンバーの家族、中国人家族（中国系インドネシア人家族を含む）」とつづいている。一方、韓国人の主婦についてみると、①「近所の韓国人家族」（50.9%）②「夫の同僚の家族」（21.8%）、③「サークル仲間の韓国人家族」（10.0%）の順である。両者の比較で特徴的なのは、どちらかと云えば日本人家族では夫の会社や子供の学校の知り合いの親との関係が深いのに対し、韓国人主婦では近所の韓国人家族やサークル仲間など、いわば近所の知り合いや友人関係とのつながりが深いことである。

年代別との比較では、とくに年代が上昇するにつれて相談相手の人数が次第に減少していく傾向がみられる。相談相手との間柄については、20代での「夫の上司の家族」（26.5%）への分散が平均を2倍以上もうまわって他のどの年代よりも高い割合をしめしていることであり、また50代以上では夫の会社関係よりも、近隣やサークル仲間の友人や家族への分散が高く、また各年代中もっとも「知り合いのインドネシア人家族」への割合が高くなってい

表 6 悩み事の相談相手（年齢別・滞在年数別）(%)

| | | 夫の 同僚の 家族 | 夫の 上司の 家族 | 近所 の（又は 日本人 家族） 日本人 家族 | 知り 合いの 学校の 家族 | 日本 人（韓 国人） 家族 サーク ル仲間 の | イン ドネ シア 人 家族 | R ・ T | そ の 他 | 相 い 談 る 相 割 手 合 の |
|-----------------------|---------|-----------------|-----------------|---------------------------------------|------------------------|---|---------------------------|-------------|-------------|---|
| (全体) | 日 本 | 42.6 | 12.4 | 38.3 | 30.0 | 19.1 | 7.5 | 0.2 | 6.9 | 90.3 |
| | 韓 国 | 21.8 | 7.3 | 50.9 | 0.9 | 10.0 | 0.9 | 0.0 | 8.2 | 88.7 |
| 年 代 別 | 20 代 | 47.1 | 26.5 | 29.4 | 2.9 | 32.4 | 11.8 | 0.0 | 3.8 | 94.4 |
| | 30 代 | 42.7 | 14.9 | 40.7 | 35.9 | 16.3 | 5.4 | 0.3 | 4.4 | 92.5 |
| | 40 代 | 41.8 | 4.1 | 34.4 | 27.0 | 18.9 | 9.0 | 0.0 | 12.3 | 85.3 |
| | 50 代 以上 | 38.5 | 0.0 | 46.2 | 0.0 | 46.2 | 15.4 | 0.0 | 0.0 | 81.3 |
| 滞 在 年 数 別 | 1 年未満 | 45.3 | 16.3 | 45.3 | 20.9 | 12.8 | 5.8 | 0.0 | 4.7 | 86.9 |
| | 1 ～ 3 年 | 42.1 | 11.5 | 41.3 | 31.9 | 17.0 | 7.2 | 0.4 | 5.1 | 91.8 |
| | 3 ～ 5 年 | 42.9 | 10.7 | 33.9 | 30.4 | 27.7 | 7.1 | 0.0 | 9.8 | 91.8 |
| | 5 年 以上 | 38.2 | 14.7 | 14.7 | 38.2 | 20.6 | 14.7 | 0.0 | 14.7 | 85.0 |

(MA)

図 8 日本人・韓国人主婦の悩み事の相談相手

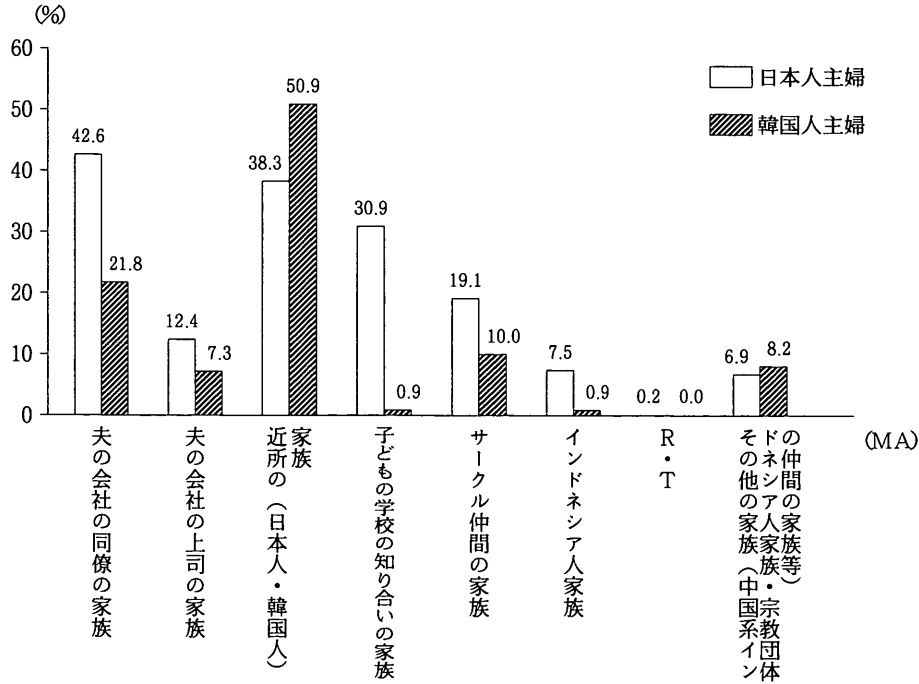
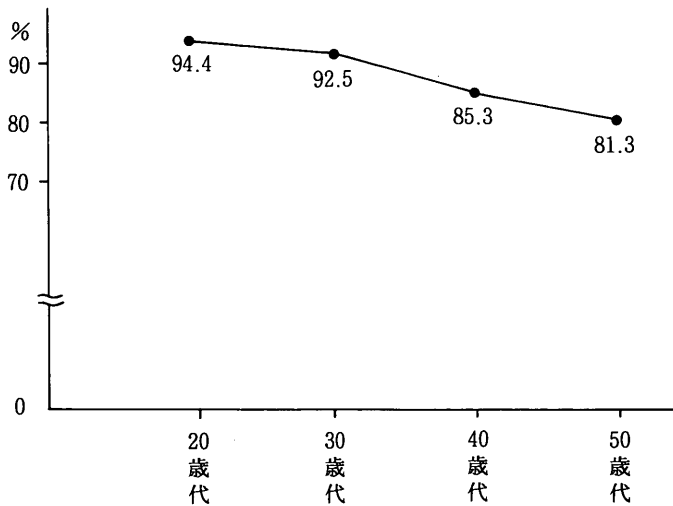


図9 悩み事の相談相手の有無（年齢別）



ることも特徴である。

滞在年数別との比較では、相談相手が「いる」とする割合では滞在年数「1～3年」、「3～5年」でともに90%をうわまわているのに対し、「1年未満」、「5年以上」ではともに80%台へと僅かながら低下してきている。相談相手の間柄については滞在年数が長くなるにつれて次第に夫の会社の同僚や子供の学校の親、さらには夫の上司の家族などから近隣の知り合いの家族、そしてインドネシア人家族などへの分散が高まっていく傾向がみられる。とくに滞在年数「5年以上」では明らかにこの傾向がみられることである。

海外生活経験の有無別との比較では、相談相手が「いる」とする割合では海外生活経験の無い主婦（91.6%）が海外生活経験の有る主婦（86.6%）よりも僅かに高くなっている。相談相手との間柄については、海外生活経験が「有る」の主婦では第1位に「近所の日本人家族」をあげているのに対し、海外生活経験が「無い」の主婦では「夫の同僚の家族」をあげ、両者の1位と2位の順位が互に入れ替わっている。これ以外の間柄についてみると、どちらかといえば海外生活経験が「有る」の主婦が個人的（＝家族的）な「近所の知り合いの家族」や「サークル仲間」、さらには「知り合いのインドネシア人家族」などへの分散が高まる傾向にあるのに対し、海外生活経験が「無い」の主婦ではいわば組織を媒介とした「夫の会社の同僚の家族」、「子供の学校の知り合いの家族」さらには「夫の会社の上司の家族」への分散が高まる傾向にあるといえよう。

学歴別との比較では、「いる」、「いない」の割合についてもまた相談相手との間柄についてもとくにきわだった差異は認められないが、僅少差ながら高学歴化するにつれて組織（会社・学校）を媒介とした相談相手の間柄から次第に個人的、家族的な付き合いの間柄へと移

行してゆく傾向が認められるといえよう。

6. 情報の収集方法（インドネシア・日本）

(1)インドネシアに関する情報

1. 夫から, 2. 日本の新聞・雑誌から 3. インドネシアのテレビ・ラジオから
4. 日本の友人から 5. 日本の家族・親族から 6. 日本の短波放送から
7. サークル・ボランティア活動の仲間から 8. スクールバスのバス停で
9. 子供の学校の親から 10. その他（ ）

前号での主婦の「赴任前の現地生活での心配事」、「滞在生活中の心配事」での分析からも明らかにされたとおり、ジャカルタ生活でのもっとも心配な事柄としては、とくに政治の不安や治安の悪化、さらには家族が犯罪などに巻き込まれることなどが第1位にあげられていた。こうした心配は、わたし達がジャカルタに到着すると同時に接触する多くの日本人関係者から、まずここジャカルタでは夜はもちろんのこと日中でさえ独り歩きは避けタクシーを使うこと、またタクシーはなにになに色のタクシーが安全などと具体的に忠告してくれることなどからも十分うかがい知ることができる。また後日インタビューに応じてくれたある年輩の主婦の方は、毎日の日課の一つとして日本からの定時の短波放送に耳をかたむけ、日本での出来事についての情報をうるとともに、それ以上に実はインドネシアの治安や政治不安に

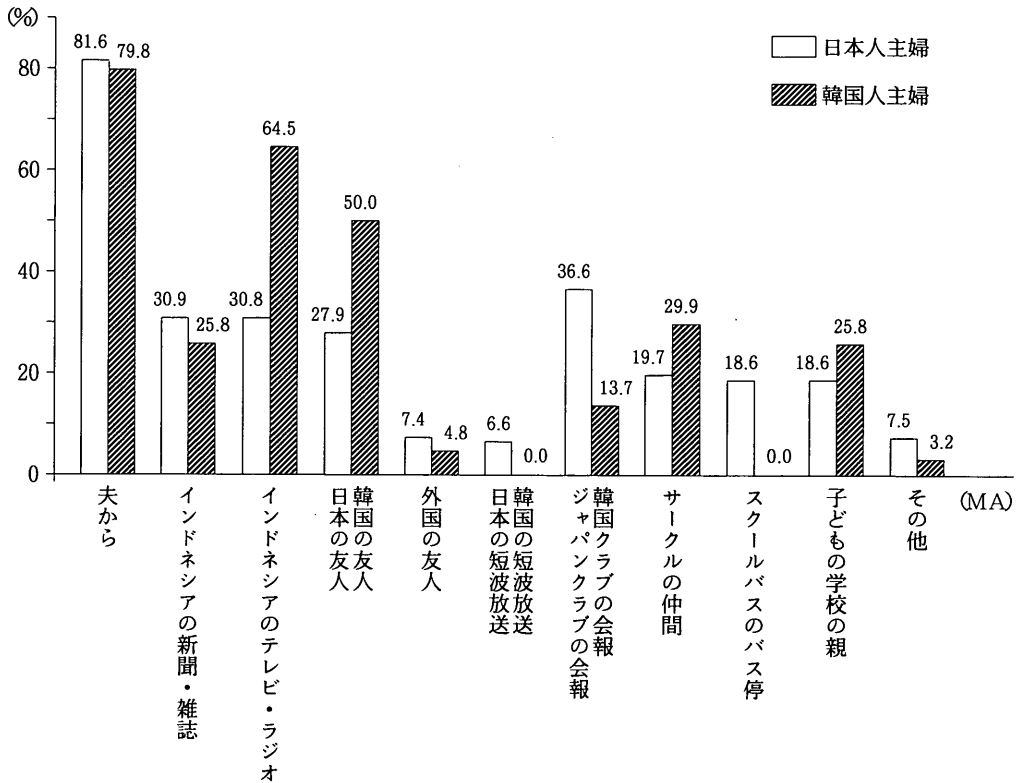
表7 インドネシアに関する情報の蒐集源（国別・年齢別・滞在年数別）

(%)

| | | 夫 か ら | 新 聞・雑 誌 の 誌 | テ レ ビ・ラジ オ の 誌 | 日 本 人 の 友 人 （韓 国 人 の 友 人） | 外 国 人 の 友 人 | 日 本 の 短 波 放 送 （韓 国 の 短 波 放 送） | （韓 国 ク ラ ブ の 会 報） ジャ パ ン ク ラ ブ の 会 報 | サ ー ク ル の 仲 間 | バ ス 停 ス ク ー ル バ ス の | 子 供 の 学 校 の 親 | そ の 他 |
|-----------------------|-----------------------|-------------|-------------------------|-------------------------------|--|----------------------------|--|--|---------------------------------|--|---------------------------------|-------------|
| （ 全 体 ） | 日 本 人 主 婦 | 81.6 | 30.9 | 30.8 | 27.9 | 7.4 | 6.6 | 36.6 | 19.7 | 18.2 | 18.6 | 7.5 |
| | 韓 国 人 主 婦 | 79.8 | 25.8 | 64.5 | 50.0 | 4.8 | 0.0 | 13.7 | 29.0 | 0.0 | 25.8 | 3.2 |
| 年 代 別 | 20 代 | 80.6 | 13.9 | 25.0 | 38.9 | 11.1 | 11.1 | 36.1 | 27.8 | 0.0 | 5.6 | 2.8 |
| | 30 代 | 81.5 | 30.7 | 26.0 | 29.2 | 7.8 | 4.7 | 34.5 | 16.9 | 19.7 | 20.7 | 8.5 |
| | 40 代 | 81.1 | 37.8 | 40.6 | 22.4 | 5.6 | 8.4 | 38.5 | 21.0 | 21.7 | 19.6 | 0.0 |
| | 50代以上 | 87.5 | 12.5 | 37.5 | 25.0 | 6.3 | 18.8 | 50.0 | 37.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 滞 在 年 数 別 | 1年未満 | 75.8 | 18.2 | 27.3 | 39.4 | 13.0 | 4.0 | 34.3 | 18.2 | 15.2 | 13.1 | 7.1 |
| | 1～3年 | 84.8 | 30.9 | 30.1 | 26.2 | 7.4 | 6.6 | 39.5 | 16.8 | 16.8 | 18.0 | 5.9 |
| | 3～5年 | 81.1 | 39.3 | 36.1 | 25.4 | 8.2 | 8.2 | 37.7 | 27.0 | 23.0 | 23.0 | 11.5 |
| | 5年以上 | 77.5 | 37.5 | 27.5 | 17.5 | 15.0 | 7.5 | 20.0 | 20.0 | 20.0 | 22.5 | 7.5 |

(MA)

図10 インドネシアに関する情報の蒐集源（日本－韓国人家庭別）



についての正確でいち早い情報を得て身の安全を守っている、と話してくれたことである。海外で生活する人々にとって快適で安全な生活を送るには、まず正確でいちはやい情報を得ることが必要とされる。そこで、ここでは家庭生活に必要な様々な情報をどのように得ているかについて、それぞれインドネシアと日本に関する情報について尋ねている。

まず、インドネシアに関する情報の収集方法からみてみたい。全体を概観すると、①「夫から」とする割合がもっとも高く、全体平均で81.6%の高率を占めている。ついで、②「ジャパン・クラブの会報から」(36.6%)、③「インドネシアのテレビ・ラジオから」(30.8%)の順となっている。以下、「日本の友人から」、「サークル仲間から」、「スクールバスのバス停で」、「子供の学校の親から」とそれぞれ僅少差で続いており、幅広く様々なルートから情報を得ていることがうかがわれる。これにたいして韓国人家庭の場合をみると、①「夫から」(79.8%)、②「インドネシアのテレビ・ラジオ」、(64.5%) ③「韓国の友人から」(50.0%)の順となっており、とくに情報収集の方法がほとんどこの三つのルートに集中していることが特徴的である。

つぎに、日本人主婦について年代別との比較でみると、第一位はすべて「夫から」とする

割合では何れの年代でも変りはない。そこで、これを除いたその他の方法の特徴についてみると、20代では「日本の友人から」(38.9%)、「サークルの仲間から」(27.8%)に占める割合が他の年代に比べてもっと高くなっている。30代では、「子供の学校の親から」(20.7%)の収集が多く、40代では地元の「インドネシアの新聞・雑誌」(30.7%)からの収集が他の年代に比べて多い。50代以上では、「日本の短波放送」(18.8%)、「ジャパン・クラブの会報」(50.0%)からの収集が多く、とくにジャパン・クラブの会報からの収集は他に比べて圧倒的に高い比率を占めていることが特徴的である。

滞在年数別との比較では、「夫から」とする割合では滞在年数「1年未満」と「5年以上」でともに平均を下回っている。また「ジャパン・クラブの会報」、「日本の友人から」の収集でも滞在年数「5年以上」では平均を大幅に下回っていることが特徴である。滞在年数別との比較で注目されることは、滞在年数が短いほどどちらかといえば「夫から」と「ジャパン・クラブの会報」および「日本人の友人から」というきわめて限られたところからの情報を得ていることである。これらに対して滞在年数が長くなるにつれて広範囲から満遍なく情報を獲得していることである。

(2)日本に関する情報

- | | | |
|-----------------------|----------------|---------------------|
| 1. 夫から | 2. 日本の新聞・雑誌から | 3. インドネシアのテレビ・ラジオから |
| 4. 日本の友人から | 5. 日本の家族・親族から | 6. 日本の短波放送から |
| 7. サークル・ボランティア活動の仲間から | 8. スクールバスのバス停で | |
| 9. 子供の学校の親から | 10. その他 | () |

つぎに日本に関する情報の収集についてみると、①「日本の新聞から」が90.3%と圧倒的な割合を占めている。ついで②「夫から」(53.8%)、③「日本の家族・親族から」(34.4%)の順となっている。以下、「日本の友人」、「日本の短波放送」、「子供の学校の親」、「サークル・ボランティア活動の仲間から」、「スクールバスのバス停で」と続いている。

これを年代別との比較でみると、何れの年代とも上位3位までの順位は全体平均と変わらないが、これ以外の収集方法についての各年代間の特徴はどうであろうか。20代では、「日本の家族・親族から」の収集(38.9%)が各年代を通じてもっとも高い割合を占めるとともに、これとは逆に「スクールバスのバス停で」(0.0%)、「子供の学校の親から」(2.8%)の収集はほとんどみられないことである。一方、これとは反対に30代、40代では「スクールバスのバス停で」、「子供の学校の親から」での収集はともに平均ないし平均をうわまわっている。50代以上の特徴としては、各年代を通じて「夫から」収集する割合が81.3%と平均を3割弱もうわまわっていると同時に、また「インドネシアのテレビ・ラジオから」、「日本の短

表8 自国に関する情報の蒐集源（国別・年齢別）

（％）

| | | 夫 か ら | 日 韓 本 国 の 新 聞 | イ ン ド ネ シ ア の | 日 韓 本 国 人 の 友 人 | 日 本 の 家 族・ 親 族 | 日 韓 本 国 の 短 波 放 送 | サ ラ ン グ の 仲 間 | ス ク ー ル バ ス の | 子 供 の 学 校 の 親 | そ の 他 |
|-------------|-------|-------------|---------------------------------|---------------------------------|--------------------------------------|----------------------------------|---|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|-------------|
| 全 体 | 日本人主婦 | 53.8 | 90.3 | 5.8 | 21.7 | 34.0 | 19.0 | 12.6 | 10.6 | 12.8 | 2.1 |
| | 韓国人主婦 | 62.9 | 94.4 | 32.3 | 30.8 | 30.6 | 0.0 | 26.0 | 11.3 | 0.0 | 0.8 |
| 年 齢 別 | 20 代 | 63.9 | 86.1 | 5.6 | 22.2 | 38.9 | 22.2 | 16.7 | 0.0 | 2.8 | 0.0 |
| | 30 代 | 52.4 | 90.9 | 4.4 | 22.3 | 33.5 | 16.0 | 9.1 | 10.0 | 13.8 | 1.9 |
| | 40 代 | 51.0 | 90.2 | 7.0 | 21.0 | 34.3 | 23.1 | 18.9 | 16.1 | 14.7 | 3.5 |
| | 50代以上 | 81.3 | 87.5 | 18.8 | 18.8 | 37.5 | 37.5 | 12.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |

（MA）

波放送から」に占める割合も他のどの年代よりも高くなっていることである。さらに付け加えればこの年代ではこれとは逆に、「スクールバスのバス停から」、「子供の学校の親から」がいずれもまったくみられないことである。この理由としてはすでに子供が学校教育を終えていることによるものであることは疑うべくもない。

7. 日本との手紙と電話による通信・連絡の回数

前号の「家計費（上昇品目）」での分析では、とくにジャカルタ生活での生活費に占める「交通・通信費」の割合は日本にいたるときに比べて大幅に増えたと回答しており、12の家計品目の中でも第5位にランクされていた。この品目のなかには車の維持費やガソリン代などとともに日本の家族や親族、あるいは友人達とのコミュニケーションのための電話代なども大幅に含まれていたことは想像に頑くない。ここでは、これら日本にいる家族や親族、友人等との間に月平均どの程度の連絡を取り合っているかについてそれぞれ手紙と電話について尋ねた。

まず「手紙」についてみると、「家族・親族」への手紙を書くことがあるかどうかについては、「書く」とする割合では59.7%とほぼ全体の6割の人が回答している。そこでこれらの人に、では月平均何回ほど書くかについて尋ねたところ、月「1回」が46.8%、月「2回」が7.5%、月「3回以上」が5.4%となっており、1人当たりの手紙の平均回数は0.91回と僅かに1回を下まわっている。一方、友人達については「書く」の割合では家族・親族の場合と同様に59.7%を占めている。同様に月平均の回数についてみると、月「1回」が48.5%、月「2回」が4.8%、月「3回以上」では6.4%となっており、1人あたりの平均回数は0.93回で家族・親族の場合と全く変わらない。

これを年代別との比較でみると、「家族・親族」への回数では「50代以上」が1.76回でもっとも多く、ついで「40代」(0.94回)、「20代」(0.93回)、「30代」(0.87回)の順となっている。つぎに「友人達」への回数では家族・親族の場合と同様に「50代以上」で1.66回でもっとも多く、ついで「20代」(1.14回)、「30代」(0.90回)、「40代」(0.88回)の順であり、いずれも「手紙」の月平均の「書く」回数では「50代以上」が他のどの年代よりも多いことがきわだっている。

では滞在年数別との比較ではどうであろうか。まず手紙を「書く」の割合では滞在年数「1年未満」で72.7%ともっとも多く、ついで「1～3年」(58.6%)、「3～5年」(54.1%)「5年以上」(52.5%)の順となっている。手紙の回数については、「1年未満」で1.3回ともっとも多くなっており、ついで「1～3年」(0.87回)、「3～5年」(0.75回)、「5年以上」(0.73回)の順となっており、いずれもそれぞれ1回を下まわっている。以上のこれらの結果から明らかなように、滞在年数の長さに比例して手紙を「書く」割合と書く「回数」については確実に減少していっていることがわかる。

つぎに、電話についてはどうであろうか。まず、「家族・親族」へ月に1回以上電話を「かける」とする家庭は88.6%を占めている。そこでこれらの家庭での平均回数をみると、「1回」が40.8%ともっとも多く、ついで「2回」(22.2%)、「3回以上」(8.5%)の順となっている。1家庭での月平均の電話回数については2.09回である。先の手紙や葉書に比較して電話の方が約2.3倍ほど多くなっている。では友人達についてはどうであろうか。月に「1回以上」電話を「かける」とする家庭は14.3%で家族・親族の場合に比較して大幅に減少している。同様に月平均の回数についてみると、「1回」が12.4%を占め、「2回以上」は僅か1.9%に過ぎない。全体での「友人達」への月平均の電話回数は0.20回と家族・親族のほぼ10分の1以下の回数となっている。

表9 月平均の通信・連絡の回数(全体平均) (%)

| | 手紙(葉書)の回数 | | 電話の回数 | |
|----------------|-----------|------|-------|------|
| | 家族・親族 | 友人達 | 家族・親族 | 友人達 |
| 0回 | 40.2 | 40.2 | 11.4 | 85.7 |
| 1回程度 | 46.8 | 48.5 | 42.0 | 12.4 |
| 2回程度 | 7.5 | 4.8 | 22.2 | 1.4 |
| 3回程度 (3回以上) | 5.4 | 6.4 | 8.5 | 0.4 |
| 4回程度 | — | — | 8.3 | 0.0 |
| 5回以上 | — | — | 7.5 | 0.2 |

注：手紙の回数については0回、1回、2回、3回以上の三段階で区分した。

図11 月平均の手紙・ハガキの回数（家族・親族－友人別）

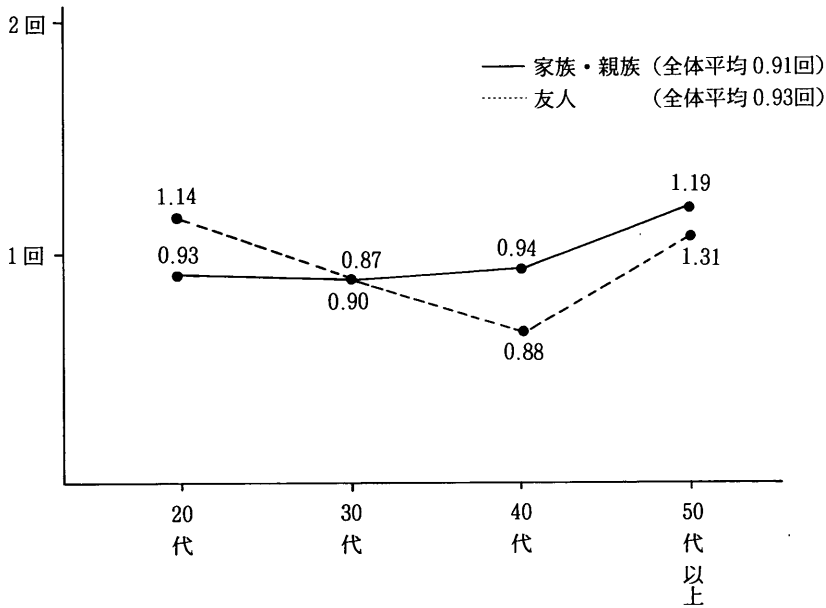
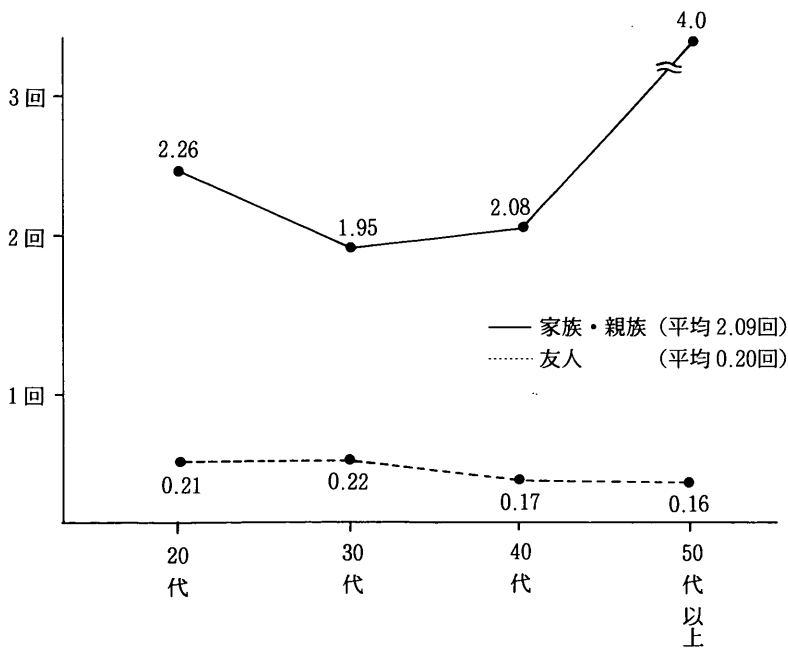


図12 月平均の電話の回数（家族・親族－友人別）



これを年代別との比較でみるとみると、まず「家族・親族」への「手紙・葉書」の回数では「50代以上」で1.19回と全体平均をうわまわって、他のどの年代よりも多いことが特徴である。これに対して「友人達」への回数では「20代」が平均をうわまわって1.14回ともっとも多く、ついで「50代以上」(1.31回)がつづいている。これとは逆に各年代の中でもっとも少ないのは「40代」(0.88回)となっている。「家族・親族」,「友人たち」のいずれでも平均をうわまわって手紙の回数の多いのは「50代以上」である。

電話についてみると、まず「家族・親族」への電話では手紙の場合と同様に、「50代以上」では平均(2.09回)をうわまわる4.0回と他のどの年代よりも回数が多く、ついで「20代」,「40代」(2.08回),「30代」(1.95回)の順とつづいている。「友人達」への回数では、どの年代も月平均の回数が1回を下まわって殆ど差異が認められない。おしなべて、電話、手紙とも「50代以上」の年代での回数の多いことが注目される。

滞在年数別との比較では、全体的な傾向として「手紙・葉書」,「電話」とともにその割合、回数においては滞在年数が長まるにつれて明らかに減少していく傾向がみられる。また海外生活経験の有無別との比較では、これらによるものと思われるその差異はほとんど見受けられない。

8. 滞在生活での楽しみ

1. ショッピングや繁華街を見て歩くこと
2. パーティへ招いたり、招かれたり
3. 日本では味わえないインドネシア料理などを食べ歩くこと
4. いろいろなところへハイキングなどに出かけること
5. インドネシアの文化に親しむことができること
6. インドネシアの異文化の中で毎日生活していること
7. 夫の仕事が順調にしていること
8. 家族(友人)どうしの深い付き合いができること
9. 日本ではできない豊かな生活ができること
10. インドネシア人と親しい付き合いができること
11. 毎日の生活にはりがあること
12. テニスやゴルフなどのスポーツができること
13. トランプやダンスなどを仲間と一緒にできること
14. その他 ()

海外駐在員の赴任先によってそれぞれの事情は異なるにしても、海外での家庭生活は家族員の全員にとっても様々な不安や悩みは絶えず、またつねに葛藤や緊張状態におかれていることは、これまでの分析結果からもあきらかである。ここでは、こうした不安やさまざまな悩みなどとは反対に滞在生活中でのもっとも楽しみなことがらについてうかがった。

まず、全体を概観すると①「日本ではできない豊かな生活ができる」が42.6%ともっとも高い割合を占め、ついで②「テニスやゴルフなどのスポーツをする」(37.9%)、③「インドネシアの異文化の中で生活している」(27.1%)の順でつづき、これらがそれぞれ上位第3位までを占める。以下「家族（友人）どうしの深い付き合いができること」、「ショッピングや繁華街を見て歩くこと」とつづいている。

これを韓国の主婦との比較でみると、①「家族（友人）どうしの深い付き合いができる」が45.2%ともっとも高い割合を占め、ついで②「夫の仕事が順調にいつている」(31.5%)、③「インドネシアの文化に親しむことができる」(29.8%)の順で、以下「テニスやゴルフなどのスポーツをする」、「韓国ではできない豊かな生活ができる」とつづいている。日・韓との比較で特徴的なことは、れぞ上位に日本人主婦の場合には日本ではできない豊かな生活やスポーツをすることをあげているのに対し、韓国人主婦では家族（友人）同志の付き合いや夫の仕事が順調であることをもっとも楽しみなこととしてあげている。どちらかといえば、日本人主婦ではあくまで個人を主体にしてとらえているのに対し、韓国人主婦では家族や夫の仕事（会社）といういわば自分を含めた集団を中心にとらえているといえそうである。ちなみに、日本人主婦では夫の仕事は第8位にランクされているに過ぎない。

年代別との比較ではどうであろうか。まず、さきにあげた第3位までの項目についての各年代の特徴をみてみると、「日本ではできない豊かな生活ができる」では20代（50.0%）が各年代中もっとも高い割合を占めるのに対し、逆に40代（36.4%）では平均を大幅に下まわっている。「テニスやゴルフなどのスポーツをする」では20代（30.6%）が平均（37.9%）を僅かに下まわって各年代中もっとも低く、ついで50代がこれに続いている。「インドネシアの異文化の中で生活している」では50代以上（18.8%）が平均（27.1%）を下まわって各年代中もっとも低率であり、ついで20代（22.2%）がこれに続いている。おしなべて、20代では生活の豊かさ、30代・40代ではスポーツ、50代以上ではショッピングやインドネシア文化に親しむことを楽しみなこととしてあげている。

滞在年数別との比較では、「日本ではできない豊かな生活ができる」では滞在年数「3～5年」（45.9%）でもっとも高い分散がみられるが、その他の滞在年数ではいずれも僅かに平均（42.6%）を下まわっている。「テニスやゴルフなどのスポーツをする」では、滞在年数「1年未満」（41.4%）でもっとも高い分散がみられ、ついで「3～5年」（39.3%）がつづいている。「インドネシアの異文化の中で生活している」では、スポーツの場合と同様に

滞在年数「1年未満」(31.3%)でもっとも高い分散がみられ、他の滞在年数ではいずれも平均を下まわっている。滞在年数別との比較では、おしなべて滞在年数が短い、とくに「1年未満」では豊かな生活、スポーツ、異文化の生活などをそれぞれあげているのに対し、滞在年数が長まるにつれて低率ではあるが夫の仕事、パーティの開催・招待、生活のはりあい、トランプ、インドネシア人との親しい付き合いなどに占める割合がややふえる傾向にあるといえそうである。

表10 滞在生活中での楽しみ(年齢別・滞在年数別)

(%)

| | 全体・ (順位) | 年 齢 別 | | | | 滞 在 年 数 別 | | | |
|------------------|-------------|-------|------|------|-------|-----------|------|------|------|
| | | 20代 | 30代 | 40代 | 50代以上 | 1年未満 | 1～3年 | 3～5年 | 5年以上 |
| 日本ではできない豊かな生活 | ①42.6 | 50.0 | 44.8 | 36.4 | 43.8 | 40.4 | 42.2 | 45.9 | 40.0 |
| テニスやゴルフをする | ②37.9 | 30.6 | 38.9 | 38.5 | 37.5 | 41.4 | 37.1 | 39.3 | 30.0 |
| 異文化の中で生活している | ③27.1 | 22.2 | 26.0 | 30.1 | 18.8 | 31.3 | 26.2 | 27.0 | 22.5 |
| 家族同志や友人達との深い付き合い | ④26.3 | 38.9 | 25.4 | 25.9 | 12.5 | 21.2 | 21.7 | 26.2 | 32.5 |
| ショッピングや繁華街を散歩する | ⑤21.5 | 30.6 | 18.5 | 23.1 | 50.0 | 29.3 | 21.5 | 17.2 | 15.0 |
| インドネシアの文化に親しむ | ⑥20.3 | 11.1 | 16.3 | 26.6 | 56.3 | 23.2 | 21.1 | 19.7 | 10.0 |
| その他 | ⑦18.2 | 16.7 | 20.4 | 14.7 | 6.3 | 19.2 | 16.8 | 19.7 | 20.0 |
| 夫の仕事が順調にしている | ⑧13.9 | 19.4 | 11.6 | 18.2 | 12.5 | 5.1 | 12.1 | 22.1 | 22.5 |
| インドネシア料理を食べ歩く | ⑨11.4 | 16.7 | 11.0 | 11.2 | 12.5 | 7.1 | 14.1 | 6.6 | 20.0 |
| パーティへ招いたり、招かれたり | ⑩8.5 | 13.9 | 8.8 | 7.0 | 6.3 | 5.1 | 9.4 | 9.8 | 7.5 |
| 毎日の生活にはりがある | ⑪7.5 | 2.8 | 6.9 | 10.5 | 6.3 | 4.0 | 6.6 | 4.9 | 30.0 |
| トランプやダンスをする | ⑫7.0 | 8.3 | 7.2 | 7.0 | 0.0 | 3.0 | 7.8 | 8.2 | 7.5 |
| インドネシア人との親しい付き合い | ⑬3.5 | 0.0 | 3.8 | 3.5 | 0.0 | 1.0 | 3.5 | 4.9 | 5.0 |
| ハイキングなどに行く | ⑭2.9 | 0.0 | 3.4 | 1.4 | 12.5 | 5.1 | 2.7 | 2.5 | 0.0 |

(MA)

9. 家族の共通行動の程度

1. ショッピングや近所などへ散歩にでかける
2. ジャカルタでの催しものや祭りなどへでかける
3. そとで食事をする
4. 観光やリクリエーション・スポーツなどをする
5. パーティに招かれてでかける
6. ジャパン・クラブに新聞の講読や読書（ビデオ）のためにでかける
7. 親しい付き合いをしている家族の家にでかける

前号での分析を含めたこれまでの調査結果から、とくに「主婦の自由時間」、「自由時間の過ごし方」、「夫婦の絆の強さ」、「起床時刻・就寝時刻」、さらには「夫婦の会話時間」などから、ジャカルタ生活では日本にいるとき以上に家族での夫婦や親子で過ごす時間の多いことがあきらかにされている。そこで、ここではこれまでにみられた家族的つながりの強さが具体的にどのような場面でみられるのかについて、日常生活に関する上記の家族行動の具体的な場面について、それぞれ「よく家族で出かける」、「各自で出かける」、「どちらともいえない」、「いくことがない」の尺度を用いて家族の共通行動の程度について尋ねた。全体の傾向からみると、まず家族の7項目の共通行動のうち、もっとも高い分散がみられるのは①「外での食事」で88.7%の高率を占める。ついで②「観光やリクリエーション・スポーツ」(51.3%)、③「催しものや祭りへ出かける」(48.0%)の順である。以下「ショッピングや散歩」、「パーティへの招待」とつづいている。これを韓国人家庭と比較してみると①「外での食事」(95.2%)②「パーティへの招待」(70.2%)③「親しい家族のところへゆく」(66.1%)の順である。以下「催しものや祭り」「観光やスポーツ」とつづいている。両者の全体的な傾向としては、どちらかといえば日本人家族の場合、さきの「滞在生活での楽しみ」での分析にみられると同様に、きわめて自分の家族中心での共通行動であるのに対し、韓国人家庭では家族対家族での共通行動が多くみられるといえそうである。

つぎに年代別との比較でみると、「外での食事」に占める割合では50代以上で僅かに他の年代より低くなっているほかはとくに変化はみられない。「観光やリクリエーション・スポーツ」では、とくに20代で平均を大幅にうまわっており、ついで僅少差で40代、30代の順とつづいている。これに対し50代以上では平均を10%強も下まわってその占める割合がもっとも低くなっている。「催しものや祭り」では30代で僅かに平均をうまわっているのに対し、その他の年代ではいずれも平均を下まわり、とくに40代では10%強も低い割合となっている。その他での共通行動について、各年代の特徴をみると「ショッピングや散

歩」,「パーティへの招待」ではいずれも20代と50代以上で高い割合を占めるのに対し,逆に「ジャパン・クラブに行く」では両者とも家族の共通行動がまったくみられないことが特徴である。これにたいして30代,40代では低率ながら「ジャパン・クラブに行く」での家族の共通行動がともにみられることである。

夫婦の絆の強さ(「大いに強まった」・「強まった」と「どちらかといえば弱まった」・「弱まった」)との比較でみると,「外での食事」では夫婦の絆が「強まった」の家族が「弱まった」の家族よりも23.7%も家族の共通行動に占める割合が高くなっており,また「観光やリクリエーション・スポーツ」では48.7%,さらに「催しものや祭りなど」でも21.5%と圧倒的に家族でよく揃って出かける割合が高くなっている。一方これとは逆に「各自で出かける」行動では,家族での「外での食事」の共通行動を除いたその他の全ての共通行動で,夫婦の絆が「強まった」家族よりも大幅に多くなっていることが注目される。これらの結果から,夫婦の絆の強さと家族の共通行動の程度との間には明確な相関関係が認められるといえよう。

子供の有無(「同居」・「別居」ないし「いる」・「いない」)別との比較でみると,「外での食事」「催しものや祭り」「観光やリクリエーション・スポーツ」ではほとんど差異は認められない。しかし,「パーティへの招待」での家族の共通行動に関しては,子供の「いない」家族が子供の「いる」家族よりも25.9%も高い割合を占めていることがとくに注目される。

表11 家族の共通行動の程度(年齢別-夫婦の絆の強弱別-子供の有無別)

(%)

| | 全体 | | 主婦の年齢 | | | | | | | | | | 夫婦の絆の強さ | | | | 子供の有無別 | | | |
|--------------------------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|---------|------|------|------|--------|------|--|--|
| | | | 20代 | | 30代 | | 40代 | | 50代以上 | | 強まった | | 弱まった | | 有り | | 無し | | | |
| | T | E | T | E | T | E | T | E | T | E | T | E | T | E | T | E | T | E | | |
| ショッピング や散歩 | 47.4 | 19.3 | 66.7 | 16.7 | 47.3 | 19.1 | 42.0 | 21.0 | 50.0 | 18.8 | 69.4 | 5.6 | 31.6 | 42.1 | 47.6 | 19.0 | 46.3 | 21.1 | | |
| 催しものや祭 など | 48.0 | 6.6 | 47.2 | 5.6 | 53.6 | 4.1 | 36.4 | 11.2 | 43.8 | 18.8 | 58.3 | 2.8 | 36.8 | 15.8 | 49.3 | 6.9 | 42.1 | 5.3 | | |
| 外での食事 | 88.0 | 0.2 | 88.9 | 2.8 | 87.8 | 0.0 | 90.2 | 0.0 | 81.3 | 0.0 | 91.7 | 0.0 | 68.4 | 0.0 | 88.9 | 0.0 | 84.2 | 1.1 | | |
| 観光やレクリエ ーション・スポー ツ | 51.3 | 20.5 | 69.4 | 13.9 | 47.3 | 23.5 | 57.3 | 16.1 | 37.5 | 18.8 | 75.0 | 8.3 | 26.3 | 36.8 | 51.2 | 20.4 | 51.6 | 21.1 | | |
| パーティへの 招待 | 46.2 | 15.5 | 63.9 | 8.3 | 43.3 | 17.6 | 44.1 | 14.7 | 75.0 | 0.0 | 66.7 | 5.6 | 31.6 | 26.3 | 41.5 | 17.5 | 67.4 | 6.3 | | |
| ジャパン・クラブ へ行く | 5.4 | 59.0 | 0.0 | 69.4 | 6.9 | 60.5 | 4.2 | 52.4 | 0.0 | 62.5 | 5.6 | 55.6 | 0.0 | 68.4 | 5.9 | 57.8 | 3.2 | 64.2 | | |
| 友人の家に遊 びに行く | 27.5 | 37.7 | 27.8 | 41.7 | 32.3 | 35.7 | 17.5 | 42.7 | 25.0 | 31.3 | 50.0 | 33.3 | 15.8 | 47.4 | 27.3 | 39.6 | 28.4 | 29.5 | | |

注: Tは「家族で一緒に揃って出かける」, Eは「各自で行く」行動の略号とした。

(MA)

10. ジャカルタ・ジャパン・クラブへの関心と利用度

| | かならず | ときどき | どちらとも いえない | あまり | ぜんぜん |
|---|------|------|---------------|-----|------|
| 1. お宅ではジャパン・クラブの図書室やVTR室をどの程度利用されますか。 | | | | | |
| 2. あなたは「さくら」や「会報」をどの程度お読みになりますか。 | | | | | |
| 3. ジャパン・クラブがあることは、お宅の生活にとってどのくらい支えになっておりますか。 | | | | | |
| 4. あなたは婦人部会にかぎらず、ジャパン・クラブの活動と一般会員のお考えとにズレをお感じになることがありますか。 | | | | | |

(大いに) (かなり) どちらとも
いえない

最後に、ジャカルタ・ジャパン・クラブへの関心と利用度についてみてみたい。まず、分析に先立って同クラブについて若干の説明をつけ加えておきたい。

ジャカルタ・ジャパン・クラブ・ファンデーション（JAKARTA JAPAN CLUB FOUNDATION）は在留邦人の親睦、日・イ両国間の親睦、および文化交流をはかり、両国間の通商および経済協力に寄与することを目的に1970年11月3日に設立されたものである。組織は法人部会員によって構成される法人部会と個人部会員によって構成される個人部会とからなっている。法人部会は、ジャカルタに事務所をもつ日本企業で構成されており、その数は190社におよんでいる（1992年現在）。個人部会は、ジャカルタ市内および近郊に在住する日本人や元日本人の成人によって構成されており、会員数（婦人部会会員）は1993年9月現在で1379人を数えている。

法人部会は別として、本調査との関係から個人部会についてさらに若干のコメントをつけ加えておきたい。個人部会のなかでも、とりわけ婦人部でのボランティア活動などを担当する福祉部、様々な親睦をはかるための年間行事を担当する行事部、催しものや各部の活動状況など伝えるための会報の発行を担当する広報部、さらには日本のテレビドラマ等を収録した3000本以上のテープを所蔵するビデオ部や膨大な図書を担当する図書部等々は、まさに在留邦人にとっては欠くことのできない情報源の場でもあり、また邦人同志のコミュニケーションの場ともなっている。

しかし、従来からこうした各国の邦人組織は一方では日本人と現地社会との間にあって一種の緩衝的な機能を果たすとともに、また著しく日本人の集団主義的な閉鎖性をも助長させ

るものとしてとらえられてきている。

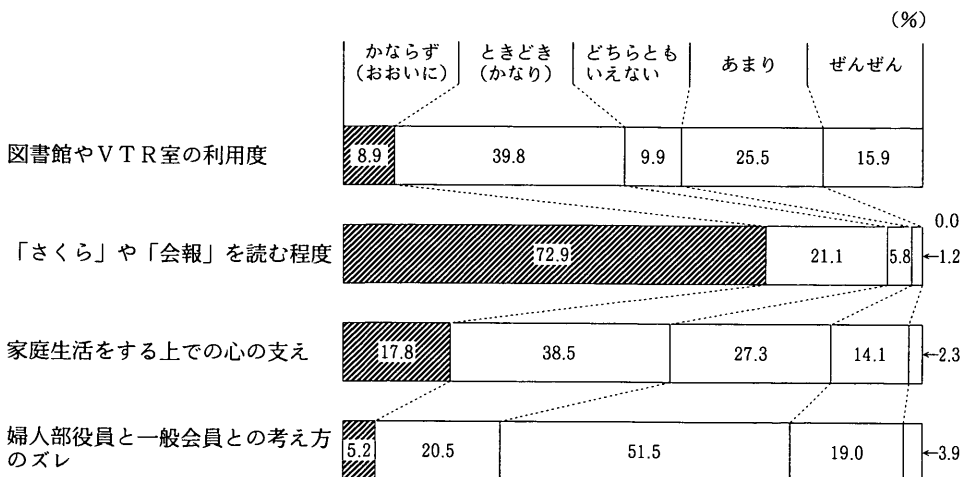
ここでは、こうした背景をふまえてクラブの運営や活動についての会員の評価と施設の利用度を中心に尋ねている。

では具体的にみてみたい。上記に掲げた4項目の質問についてはそれぞれ5段階尺度で尋ねている。

まず、ジャパン・クラブの「図書室やVTR室（ビデオルーム）」の利用度については全体の48.7%の人が（「大いに」と「ときどき」）利用していると回答しており、利用しない（「あまり」と「ぜんぜん」）は41.1%とかなり拮抗している。つぎに「さくら」や「会報」をどの程度読んでいるについては、読む（「かならず読む」と「ときどき読む」）が94.4%と圧倒的な購読率をほこっている。家庭生活にとっても「さくら」や「会報」は主婦にとって欠かすことのできない情報源としての役割を担っていることがわかる。つづいてジャパン・クラブのあることは、家庭生活やあなた自身にとってどの程度心の支えになっているについては56.3%と過半数の人が「支えになっている」とし、これに対し「支えになっていない」は41%を占めている。全体的にみて評価は二分されているといえよう。婦人部会の活動について一般会員と役員との間に意識のズレがあるかどうかについては、「ある」が25.7%、「ない」が22.9%、「どちらともいえない」が51.5%をそれぞれ占めている。これらの結果は、そのときの役員や活動内容によってはきわめて批判的であることを示唆しているものといえよう。

これを年代別との比較でみると、まずジャパン・クラブの利用度については40代（57.0%）が平均（48.7%）うまわってもっとも高い割合をしめているが、その他の年代はいず

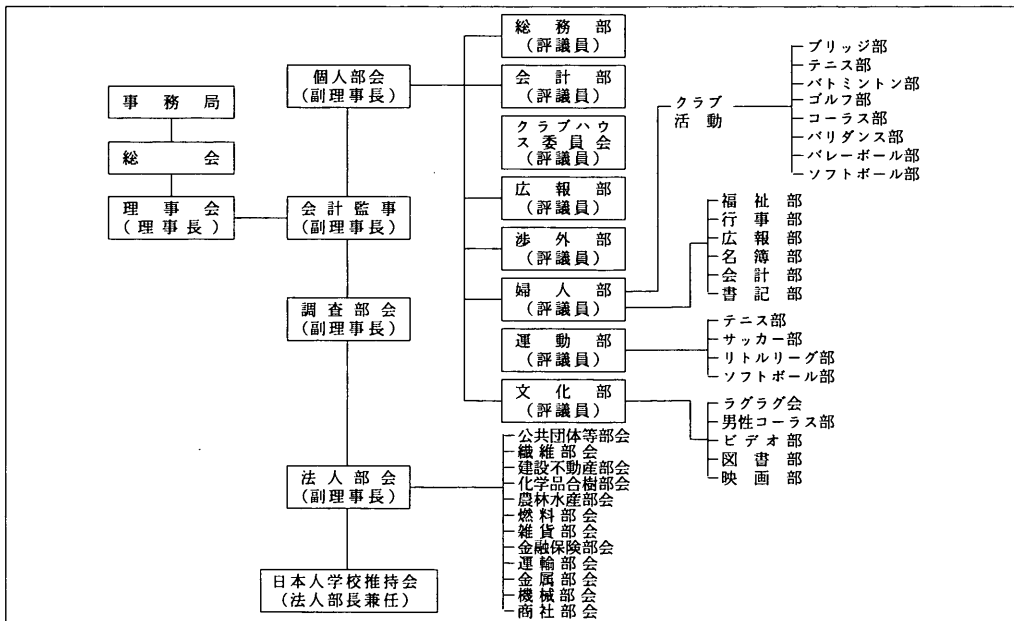
図13 ジャパン・クラブへの関心と利用度



れも僅かに平均を下わわっている。「さくら」や「会報」を読む程度では、いずれの年代でも90%以上を占めており、とくに50代以上では100%という驚異的な講読率であることが注目される。ジャパン・クラブの存在が自分自身や家庭生活にとってどの程度の支えになっているかについては、40代（60.2%）が平均（56.3%）うわまわってもっとも高い割合を占め、ついで50代以上がこれにつづいている。婦人部会の活動と一般会員との間のズレについては、20代が僅少差ながら各年代中もっとも高い割合となっており、ついで30代、50代以上とつづいている。

滞在年数別との比較でみると、ジャパン・クラブの利用度では滞在年数「1年未満」で平均を下まわり、他よりも低い利用度となっているが、各年代間のその差は僅少である。つぎに「さくら」や「会報」を読む程度では、明らかに滞在年数の長さ按比例して読む割合が増加し、とくに滞在年数「5年以上」では97.5%の高率を占めている。これに対して滞在年数「1年未満」では平均を僅かに下まわっている。ジャパン・クラブがどの程度に支えになっているかでは、滞在年数「1年未満」で他のどの滞在年数よりも低い割合をしめてるほかはとくに変化はみられない。婦人部会の活動について、婦人部役員と一般会員との間にズレを感じるかどうかでは、「1～3年」と「5年以上」でもっとも感ずると回答している。おし

図14 ジャカルタ・ジャパン・クラブの組織図



資料 ジャカルタ・ジャパン・クラブ個人部会有志編著『ジャカルタに暮らす』

日本貿易振興会（ジェトロ），昭和62年

なべて、ジャカルタ・ジャパン・クラブへの関心と利用度については40代がきわめて意欲的であり利用度が高いのに対し、20代でしかも滞在年数「1年未満」ではやや否定的であることが特徴である。

以上の結果から総じていえることは、前述の「こうした組織が日本人と現地社会の緩衝地帯となって、日本人の集団的行動と閉鎖性を助長させるものである」との指摘はともかくとして、少なくともジャカルタ在留邦人の場合、家庭生活に必要な情報収集の場であると同時にコミュニケーションの場でもあり、また連帯感や親睦を深めるためにもなくてはならない重要な機関となっていることは敢えて指摘するまでもない。

III おわりに

以上、前号につづいて調査結果の分析からジャカルタ在留邦人の家庭生活と意識について通観してきた。本稿の第一の課題は家庭生活の実態を分析するとともに、また筆者の主要関心であった海外在留邦人の現地社会への適応・不適応過程とその時間的経緯、および適応パターンの把握等についても分析を試みることであった。これまでの二回にわたる分析からはこれらの課題にたいして十分な説得力のある成果をうるまでにはいたらなかった。しかし、本調査によってこれまでには得られなかった貴重なデータをうることができたことも事実である。例えば、さきの適応・不適応を規定する従来の一般的な属性、すなわち説明変数として考えられてきたもの（年令、学歴、海外生活経験の有無、滞在年数、子供の有無、夫の職業等）の外にこれまでほとんど考慮されてこなかったと思われる本人の出身地（都市部・農村部）、家族形態（核家族・拡大家族）、日本からの家族・親族・友人達の赴任先への来訪の有無、日本への健康診断のための一時帰国の回数・滞在日数、現地での住宅と居住地域等が規定要因の一つとしてこれまで以上に無視しえないほど深くかかわっていることである。

こうした変数が最終的にどの程度に適応・不適応現象の規定要因としてかかわるかといった、いわばこれらのモデル化した理論的考察の必要性が痛感されることである。こうした課題にたいしては既存データの再検討や整理はもちろんのこと、今後のさらなる継続的な調査研究が必要とされよう。

なお、これまでの家庭生活に関する調査はすべて日本側からのものばかりであり、現地のインドネシア人がどのように評価しているかについての資料はほとんど持ち合わせていない。今後は現地サイドからのよりインテンシブな分析と考察の必要性が求められているといえよう。

最後に、ジャカルタ在留邦人への評価ともみてとれる、また現在の日本とインドネシアの典型的な関係を象徴していると思われる以下のような新聞記事にふれておきたい。それは、

本調査の補足調査のさなかにインドネシアの大衆紙 KOMPAS（1993年8月31日付け朝刊）に掲載された日・イの交流に関する次のような記事内容である。見出しは、“インドネシア－日本の緊張した関係が懸念される”（「Dikhawatirkan Ketegangan Hubungan Indonesia-Jepang」）と題して、インドネシアに滞在している日本人は経済的な利益追及ばかりに専念し、現地との交流や社会的な付き合いはまったく無視していることに対しての深い苛立ちを表明したものである。とくに、この記事で注目されることは、“インドネシアに滞在している日本人は気をつけることである”（「Oleh Karenanya, dibutuhkan sikap kehati-hatian orang Jepang yang tinggal di luar negaranya」）と直接的に警告を発していることである。同紙のこの厳しい指摘は1974年の反日暴動を思い起こさせる一方、当時の出来事を忘れてしまった多くの日本人に対するまさに警告でもあるといえる。こうした警告に対して、現地在留邦人の間ではこのての記事は日本からのさらなる援助を引き出そうとするときの常套手段であるなどの穿った見方も無くはないが、日・イ両国のひいては東南アジアとの国際的な関係はもはや誰の目にも資本の論理だけでは通らないことは明らかであり、文化交流による対等な人間関係を基礎とした広く深い国民間の交流こそが望まれている。そのためには、まさにインドネシアの”ジカ・テダッ・クナル・マカ・テダッ・サヤン” JIKA TIDAK KENAL MAKA TIDAK SAYANG（「知りあわずして、愛情は生れない」の意）の諺どおり、相互の文化を理解することからはじめねばならない。それはまた日本人にとって国際化社会の進展する中で如何に日本独自の文化を保持し、また国際社会にむかつては自国文化をいかに主張しうるかということでもある。こうした言い尽された、また聞き飽きた感のある主張に対しては、ではお互いの文化を理解し合えば、まさに現存する国際間の摩擦や流血の惨事が解決しうるかという疑問が発せられるかも知れないが、これらにたいしては何の具体的な回答も用意されてはいない。しかし、わたし達はこうした国際社会のなかにあって相互理解こそが唯一のものであることを信じないわけにはいかないのである。それはまた世代をこえた時間的な流れを必要としていることでもある。

付 記

図1 学歴

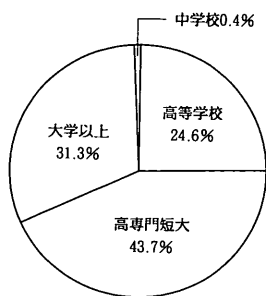


図2 年令

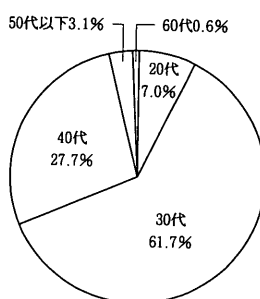


図3 夫の職業

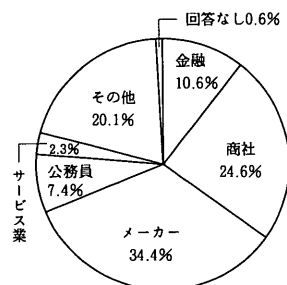


図4 滞在年数

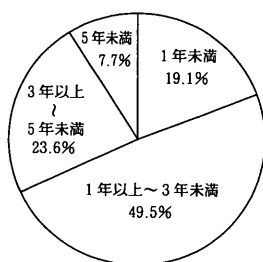


図5 海外生活経験の有無

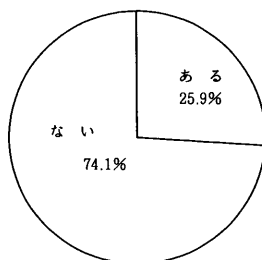


図6 子供の有無

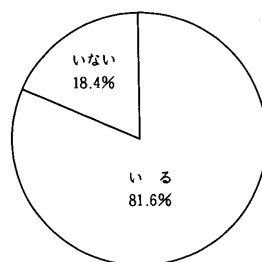


図7 子供との同居・別居別割合

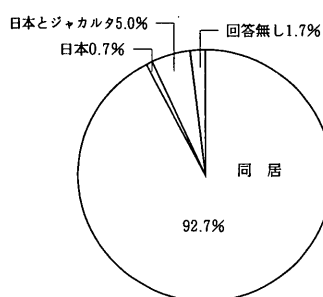
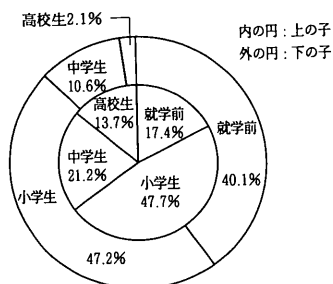


図8 子供の年令



注

1. 本調査は、ジャカルタにおいて韓国系企業駐在員家庭の20歳以上の主婦150名にたいして実施されたものである。基本的な調査の枠組については、1992年に実施された「ジャカルタ在留邦人の家庭生活に関する調査」を踏襲している（「ジャカルタ在留韓国系企業駐在員家庭の生活と意識に関する報告書」1994.）
2. NHK『国民生活時間調査』1990年
3. NHK, 同上
4. 労働省「日米勤労者の生活費等の比較調査」（労働大臣官房政策調査部編『勤労者生活と流通』大蔵省印刷局, 1994. P.4.
5. 高橋準郎「ジャカルタ在留邦人の家庭生活に関する調査報告書」淑徳大学高橋研究室1993. および森・常身・高橋「8 海外での家庭生活」（市村真一編『日本企業インアジア』東洋経済新報社, 1979.）
6. 田中 彰『日本人と東南アジア＜インドネシアで考える＞』平文社, 1989, (小学館創造選書<54>) P.153.
7. 外務大臣官房領事移住部編『海外在留邦人数調査統計』＜平成5年度＞
8. 労働省『出入国管理統計年報』＜平成5年度＞
9. 御堂岡 潔「外国人イメージとマスメディア－テレビの役割－」（高橋順一他編『異文化へのストラテジー』川島書店, 1991.）P.203.
10. 経済企画庁国民生活局編『国際化時代の人づきあい』大蔵省印刷局, 昭和63年, P.101.
11. 拙稿「ジャカルタ在留邦人の家庭生活」＜そのⅠ＞（『淑徳大学研究紀要』第28号, 1993.）
12. 住友生命保険相互会社『夫の海外活動を支える奥様の胸の内』1989.

The Homelife of a Japanese Living in Jakarta (II)

by Junro TAKAHASHI

In the report of the previous survey, we analyzed the domestic lives of Japanese nationals living in Jakarta, especially changes in the characters of married couples, the strength of their relationships, problems in their lives in Jakarta, problems with hired help, and their relationships with neighbors.

In this report, we would like primarily to analyze the times that housewives get up and go to bed, the numbers of Japanese and foreign friends that they have contact with, sources of information, frequency of communication with Japan (by letter or telephone), and the extent of shared activities as a family, which are subjects which we could not analyze in the previous report. Also in this report, we would like to conduct a comparative study of domestic life of Japan and Korea based on a comparison with the "Survey on the Domestic Life and Consciousness of Korean Living in Jakarta (1993)," which was conducted following the "Survey on the Domestic Life and Consciousness of Japanese Living in Jakarta (1992),"

The following are the specific subjects of analysis that have been taken up here.

- 1) a. Times that housewives get up and go to bed
b. Times that husbands return home
- 2) Discipline of children
- 3) Factors obstructing relations with foreigners
- 4) Number of friends they have contact with (Japanese and foreign friends)
- 5) Persons they discuss problems with
- 6) Sources of information
- 7) Frequency of communication with Japan
- 8) Enjoyable activities in their lives abroad
- 9) Extent of shared activities as a family
- 10) Interest in the Jakarta Japan Club and frequency of usage of the facilities